
—不可能な共存—

結子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

― 不可能な共存 ―

【Nコード】

N7772Q

【作者名】

結子

【あらすじ】

愛してる

心から

大嫌い

心の底から

ドラッグが結び付ける過去と現在がリンクした時

それぞれの感情が

爆発する…

悪夢

「なあ、お前もやれよ」

派手な格好の少年が、同じく派手な格好の少女に言った。

「え？あー、あたしはいいや」

少女がそう答えると、少年は機嫌を損ねたような顔をした。

「何？お前、俺の事友達だと思ってない訳？」

「そんな事ないよ。でもさあ……」

「大丈夫だからさ」

少年は少女に小さなビニール袋を差し出した。

中には半透明の粉が入っている。

少女は、その袋を渋々受け取った。

それは、魔法の粉でもあり、破滅の粉でもある。

使い方によって、様々に変化する粉……

少女はその袋を一向に開けようとしない。

それを見かねて少年が言う。

「お前は初めてだから、こつやってジュースに混ぜて飲めばいいんだよ」

少年は、少女が持っていた甘めのオレンジジュースを奪い取り、粉をサラサラと流し込んだ。

粉がジュースの底に沈んでいく様は、まるで夕焼けの海に雪が降り積もっているかのようにだった。

その美しい光景を見ていた少女の顔はうっとりとしていた。

少年が、ジュースをゆっくりと少女に差し出す。

少女はそれを受け取り、ゆっくりと自分の口へと持っていた……

天敵

突然、意識がハッキリする。

激しい息切れを感じた。

汗をかいている。

不快。

きつと、何か嫌な夢でも見ていたのだろう。

まったく覚えていないけど。

ひどく喉が渴いた。

水でも飲もうと冷蔵庫に手をかけた瞬間、頭がフラフラして、その場に膝から崩れ落ちた。

冷蔵庫の取っ手をつかみ、腕の力だけで立ち上がると、そのまま冷蔵庫の中のミネラルウォーターを乱暴につかんだ。

500mlのペットボトルの半分を一気にのどに流し込むと、少し気分が楽になった。

ふと時計を見る。

午前5時を少しすぎたところ。

もう1度寝ようかとも思ったが、どうせ6時半には起きなければいけないので、潔く起きる事にした。

あたしの名前は藤嶺カヅキ。

高校で音楽の教師をやっている。

特別教師になりたかったというわけでもないのだが、気がついたら生徒の前でピアノを弾いていた。

あたしが教えている生徒たちは、人の言うことを聞かない事に関しては天下一品だ。

まあ、あんたたちの気持ちもわかるけどさ、ちょっとくらい聞いてくれたっていいじゃん。

時計が午前7時30分を回り、あたしはさっさと家を出た。

あたしの家から職場まではバスと地下鉄を乗り継いで40分弱。

今日は朝の職員会議がないから、学校に着いても授業が始まるまで

には少し時間がある。

コーヒーでも飲もうか。

学校で飲むコーヒーはなぜかやたらとおいしい。

くだらない事かもしれないが、あたしが教師を続けているのはこの
コーヒーの為かもしれない。

コーヒーを飲み終わると、いいタイミングで予鈴がなった。

さて、音楽室行くか。

1時間目から音楽って絶対めんどくさいよな。

職員室の入り口のすぐ横にかけてあるたくさんの鍵の中から音楽室

の鍵を取り、職員室が出た。

廊下を歩き、階段を3階まで上がって、また少し廊下を歩いてやつと音楽室。

廊下を歩いている最中で、早くもぎゃあぎゃああとつるさい声が聞こえてきた。

うんざり。

あたしは嫌々ドアに手をかけた。

だが、開けようと思っても開かない。

生徒があたしに意地悪をしている訳ではなく、ただ校舎が古いだけなのだが、必要以上にイライラする。

あたしが必死でもがいていると、男子生徒から声を掛けられた。

「何やってんの？」

このクラスの狭間コウスケがのろのろと廊下を歩きながら、そう言い放った。

堂々の遅刻だが、なんの悪気もなさそうだ。

「ドアが開かなくて」

「ふうん」

「開けてくれない？」

コウスケは、ものすごい勢いでドアを蹴った。

中の騒がしい声が止む。ドアが開いた。

「あんた、いつになったらこのドア開けられるようになるわけ？」

あ、ムカつく。

でも、とりあえず礼は言っておく事にした。

「ありがとう」

あたしは引きつった笑顔をコウスケに向けた。

コウスケは無表情でスタスタと教室内に入った。

あたしもそれに続いて入る。

軽く全員を見回してみると、ため息が出そうになった。

クラスのほぼ全員ががあたしに興味を示さない。

ものすごく真面目な生徒が1人くらいいてもよさそうだが、このクラスにそれは期待できない。

生徒達は、各自メイクやらメールやら読書（マンガやファッション雑誌）で何かと忙しそう。

たまに音楽の教科書を開いているやつがいるかと思ったら、バツハの肖像画に落書きしているだけだったり。

あんたらさ、ちょっとは学ぼうよ。

そのためにガツコウってあるんだよ。

まあ別にいいんだけどさ。

「今日は何するか覚えてる？」

誰にというわけでもなく聞いてみた。

「覚えてません」

妙に色っぽいこの子は矢崎ユウリ。

なぜだかいつもあたしに絡んでくる。

そんなにあたしが嫌いかな？

でもまあ、そういう年頃だよな。

あたしだって、あんたたちくらいの年の時は意味もなく教師という生き物が嫌いだったよ。

「今日はドラムのテストするから、名簿の順にたたいてね」

「そんな事聞いてませうん」

その語尾の伸ばし棒をなんとかしていただきたい。

「言ったわよ。リズムのプリントも配ったはず」

あたしは正直テストが嫌いだ。

少し前までは一切やらなかったんだけど、もう1人の音楽教師に怒られたので仕方なくやっている。

普段、態度の悪い子が実技テストで意外な才能を発揮してもいい成績はつきたくない。

その場だけの評価で成績なんてつきたくない。

こう見えて、あたしは意外に真面目なセンセイなんだよ。

ドラムのテストは速やかに進み、コウスケの番がきた。

「じゃあ次、狭間くん」

コウスケは無言でドラムに向かって歩いてくる。

ドカッとイスに座ると、スティックを見つめた。

「どうしたの？」

コウスケはあたしをチラッと見ただけで、返事をしなかった。

コウスケがリズムを刻み出すと、そこにいる全員がすぐに引き込まれた。

何の狂いもない見事なドラムさばき。

たたき終わった事にも気づかないくらい聞き入ってしまった。

「終わったんだけど」

コウスケがぶっきらぼうに言った。

「え？ああ、ゴメン。お疲れ様。もついいよ」

あたしがそう言った後も、なぜか目を離さない。

「何？」

そう聞くと、コウスケはやっぱり無愛想に言った。

「スティック変えた方がいいんじゃない？」

スティックをよくみると、傷だらけだった。

「そうね。検討します」

次は矢崎ユウリの番。

「矢崎さん」

「なに？」

「次、あなたの番」

「めんどくさい」

そう言うあなたがめんどくさいワケよ。

ユウリは机の上に足を乗せて、一向に動こうとしなかった。

「めんどくさいとか言わないで、やってくれないと困るのよ」

「あんたが困っても、あたしには関係ねえよ」

「とにかく…」

言いかけた時、ガタンと大きな音が教室内に響いた。

コウスケが椅子に座りながら、自分の机を蹴り倒していた。

「さっさとしろよ」

コウスケにそう言われたユウリは、むくれた。

「なんであんたに言われなきゃなんないの？」

消え入るような声でそう言ったユウリだったが、荒っぽく立ち上がると、ドラムの前の椅子に座った。

が、そのまま足と腕を組み動かなくなった。

「何してるの？」

ユウリは明らかに不機嫌だ。

「どうすればいいのかわかんない」

「さっき説明したでしょ？このリズムをドラムでやって」

あたしは、リズムがプリントされている用紙をユウリに差し出した。

ユウリは乱暴に用紙を受け取り、それをあたしの目の前にかざした。

「何？」

「あんだ、ウザいよ」

ユウリはイヤな笑みを浮かべると、そのままの表情でリズムの用紙

をあたしの顔の真ん前でビリビリと破った。

「こんな事やってられっかよ」

破った紙をクシャクシャに丸め、あたしの顔に投げつけ、そのまま出て行ったユウリはすでにこの教室内の生徒全員の注目の的となっている。

あたしは、うつむいたまま体を震わせた。

心臓もパンクしそうなくらいにドキドキしている。

もちろん、泣いているのではなく怒りのせい。

「せんせー、泣かないでー」

何人かの男子生徒が、勘違いをして慰めの言葉をかけている中で、1人だけあたしの心情に気付いていた。

「先生。我慢しなよ。首になったら困るだろ」

狭間コウスケが言った。

コウスケは、あたしがなんとかユウリに仕返しをしようと思ったことを見抜いたのだ。

確かに、首なったら困る。

「大丈夫。ありがとう」

あたしがニツコリ笑って言うと、コウスケも少し笑った。

他の生徒達は、あたしたちの会話の意味がよくわからなかったらしく困惑している。

コウスケ。

あんた、いいヤツ。

ユウリ以外の全員がテストを終えても、まだ授業は終わらなかった。

10分残っている。

「じゃあ、あと10分は自由にしてていいよ」

すぐに音楽室は一層騒がしくなった。

先程までは一応抑えていたようだ。

「ねえ、先生」

あたしが、油断しきった顔でぼーっとしていると、1人の女子生徒が声をかけてきた。

「ん？」

「コウスケの事、どう思う？」

また…なんというか…予想外の質問だね。

女子生徒は心配そうな顔をしている。

「どつって…いい子だと思うけど」

女子生徒は益々心配そうになった。

「それだけ？」

「それだけ」

「ホント？」

「ホント」

女子生徒はようやく納得したようで、明るくかわいらしい顔になった。

この子の名前は、連城ツバキ。

ツバキは、お人形さんのような外見をしていた。

校則違反の明るい茶色のくるくるパーマは、注意する気が失せるく

らいよく似合っている。

「よかったあ」

ツバキは満面の笑顔を見せてくれた。

なんだ、この笑顔。

食っちまいたい。

思わず持って帰りたくなってしまいくらい可愛い笑顔だった。

この子はコウスケの事が好きなのか…

そう思うと、自分の中に違和感が生じた。

小さな嫉妬心。

あれ？

恍惚

「あゝなんか、ヤバい。俺、今なら何でも出来る」

少年の目は明らかにおかしかった。

恍惚そのものの様に見える。

少年の周りにはオレンジシースが水たまりのように広がっていた。

それをじっと見ている少女の目もまた何かがおかしい。

「お前、今どんな感じ？」

少年が少女に聞く。

「気持ちいい…」

少女のその答えに満足したのか、少年はうつろな目のままニヤリと笑った。

「やってよかっただろ？」

少年は少女の肩に腕をまわした。

「うん」

「お前は…もう俺の物だよ」

少女は何も言わない。

ただ空を見上げていた。星も出ていない都会の汚れた夜空を見上げ

ていた。

「ねえ」

少女が不意に口を開いた。

「あ？」

少年は少しめんどくさそうに答える。

「いつからやってんの？」

「だいぶ前」

「だいぶ前っていつ？」

「さあ…覚えてねえよ」

「ふうん」

少女は少年の顔を一瞬見て、また空に目を戻した。

生暖かい何かが少女の唇に触れた。

目を開けると、すぐ近くに少年の顔があった。

ここは学校だった。

8月の真夜中の学校の屋上。

もちろん誰もいない。

「外だから……」

少女が言う。

「誰もいねえよ」

少年が少女の言葉を打ち消す。

まだ了承を得ていないにも関わらず、少年の手はスルスルと少女のTシャツの中に入っていく。

それでも少女は空を見上げていた。

告白

ふと時計を見る。

やっぱり午前5時。

いつものように、ミネラルウォーターを飲もうと冷蔵庫に向かった。

少しずつ喉に流し込むと、気分がスッキリした。

今日はドライブがてらに車で通勤しようか。

生徒に傷でもつけられたらたまらないのでいつもは車では行かないけれど、今日はなんとなく車に乗りたい気分だ。

7時50分になったので、家を出た。

電車じゃないので、家を出る時間も少し遅い。

高校生の時に父親に買ってもらった愛車のボルボに乗り込み、エンジンをかける。

同時に音楽が鳴り出した。

「よし、行くか」

1人でつぶやき、アクセルを踏んだ。

見慣れた景色も気分によって、良くなったり悪くなったりするものだ。

流れている音楽を軽く口ずさみながら、学校へと向かった。

学校に到着すると、騒がしくあたしを呼ぶ声が聞こえてきた。

「藤嶺先生！藤嶺先生！」

せっかく気持ちのいい朝なのに誰だよ。

うるさい。

声の主はすぐにわかった。

つるっばげで脂性のこの学校の教頭だ。

「なんですか？」

「あの、ちょっと話があります」

この教頭はなぜか、あたしと話をする時はいつもビクビクしている。

「だから、なんですか？」

とにかく、めんどくさい事を言われそうな気がしてならない。

「申し訳ないんですが…」

そう思うなら、その先は言わないでほしい。

「担任をやってもらえませんか？」

「は？」

「3―Aの担任をやって頂きたいんです」

くそ。

話が見えない。

この教頭はったおしてやろつかな。

「どいつ事です？あのクラスにはちゃんと担任がいるでしょう」

キツイ口調で言うと、教頭はあたしから目をそらした。

「そっなんですが…柳先生が…」

柳とは、この間まで3―Aの担任だった教師だ。

「柳先生が何ですか？」

教頭のスローペースの話し方があたしをイライラさせた。

「蒸発しました」

何を言い出すんだ、このタコは。

「蒸発？なんで？」

あたしはついに敬語を忘れた。

「理由はわかりませんが、とにかく行方不明になったんですよ」

「はぁ…で、どうして後任があたしなんです？」

「それが…誰もあのクラスの担任をやりたがらなくて…だから、生徒に一番年齢が近い藤嶺先生がいいんじゃないかと思ひまして…」

あたしの事怖い割にはけっこう言いたい事言うじゃねえか。

つまり、一番年下で身分も低いあたしに、イヤな仕事を押し付けようってわけなんですよ？

「そうですか、わかりました」

教頭は、あたしが意外に素直に引き受けたもんだから驚いている。

「引き受けて頂けるんですか？」

「はい」

「ありがとうございます」

教頭はあたしの手をつかみ、無理矢理に握手をした。

いてえよ。

キモいよ。

放せよ。

他の教師たちもホツとしているのが見え見えだった。

重い気持ちで3―Aに向かっていると、自然とため息が出てきた。

3―Aの生徒が嫌いとかではなく、担任を持つ事自体がもうめんどくさいのよ。

そんな気持ちを抱きながらトロトロと歩いていると、目的の教室に着いてしまった。

教室のドアに手をかける。

ドアを開ける。

この一連の動作に、できる限り時間をかけた。

ドアが開くと、生徒達の目は一斉にあたしを捉えた。

なんだか気まずい。

「はあ？なんで藤嶺？意味わかんねえ」

さっそく矢崎ユウリに罵声を浴びせられたが、気にしない。

「えっとー、今日からあたしがこのクラスの担任だからよろしくね」

「は？マジ何言ってるの？」

あたしは一応先生なんだけども。

なんだ、この扱いは。

「このクラスの担任だった柳先生は、体調が悪いのでしばらくお休みです。だから、その間はあたしが担任することになったの」

「柳先生、大変な病気とかなんですか？」

今度は連城ツバキだ。

この子にはあたしを敬う気持ちが少しあるようだ。

あたしが高校生だった頃はどっちかっていうと、ユウリみたいなタイプだった。

むしろ、ユウリに勝る悪ガキだった。

その時のあたしの担任から言わせると、あたしが学校に行くという事自体がすでに奇跡だったらしい。

学校には行かないわ、行ったら行っただで暴れるわで大変だったんだって。

『お前はただ椅子に座ってるだけでいいから』

それが唯一出された担任からの課題だった。

それすら守れなかったあたしに課された新たな課題は、

『1分でもいいから学校に顔をだせ』

どうやらこれが担任の中での最低ラインらしいと気づいたあたしは、その課題だけは確実にこなした。

毎日短時間でも学校に顔を出すことによって、学校の楽しさというものもわかってきた。

キチンと6時間授業に出ることも増えていった。

もともとそれほどバカではなかったみたいで、必死で勉強したら大
学にも入れた。

あたしが更正できたのはその先生のおかげだと思う。

もし、あの時の担任が違う教師だったらと思うとゾッとする。

だからたぶん、あたしはその先生に一生感謝し続けるだろうな。

「大丈夫よ。ただし体調が悪いだけだから」

「そっか。ならよかった」

ツバキはあたしにニッコリ笑いかけた。

あたしもそれに応じた。

チャイムが鳴ったので朝のショートホームルームを終え、職員室に戻ると、またもや不穏な空気が漂っていた。

今度は何よ。

あたしは誰とも目を合わさないように自分の机に向かった。

「あ、藤嶺先生」

声を掛けられてしまった。

もー。

「何でしょう？」

「狭間コウスケが退学届を持ってきました」

「は？」

教頭はとにかくコレを見ると、というように封筒を差し出した。

白い封筒には『退学届』とても整った字で書いてある。

コウスケが退学？

そんなバカな。

封筒から中身を取り出し広げると、便箋の真ん中にたった1行『一身上の都合で自主退学させていただきます』とだけ書いてあった。

その『一身上の都合』っていうのをみんな知りたいんだけどな。

「この退学届いつ持ってきたんですか？」

「ついさっきですよ」

今思えば、さっき――Aの教室に行った時コウスケはいなかった。

あたしは職員室を飛び出した。

「藤嶺先生！どこ行くんですか？！」

そう叫んでいる教頭を無視して、あたしはコウスケを探した。

どこにいるんだろう。

どうして退学届なんて出したの？

何が何でも理由を聞き出してやる。

あたしは自分が高校生だった頃を思い出し、コウスケの居場所を予想した。

何かイヤな事があったり、考え事をするときには必ず行った場所。息切れを感じながらたどり着いたその場所は、屋上。

生徒の出入りは禁止してあるため、赤いポールが置いてあったが、あたしはそれをどかして屋上に入った。

広い殺風景な屋上のだ真ん中には、タバコをくわえて空を見上げているコウスケの姿があった。

あたしの心臓は、そんなコウスケを見て何度か激しく動いた。

昔の自分に似ているからだろうか…

「もう見つかった」

コウスケはあたしの方を見ないで言った。

あたしが来ることをわかっていたような言い方だ。

「すごい走ったからね」

あたしが言っと、コウスケはフツと笑った。

かすかに笑ったその顔は、とてもキレイだった。

かつこいいとか男前という言葉よりも、コウスケにはキレイという言葉が相応しい。

コウスケの隣に腰を下ろすと、コウスケはあたしにタバコの箱を差し出した。

あたしが首を横にふると、また少し笑ったあとに箱を引っ込めた。

「なんで退学届なんて出したの？」

コウスケの目をじっと見つめると、コウスケも見返してきた。

キレイな目。

カラーコンタクトでもしているのだろうか、ほんのりグリーンがかっている。

「別に」

「理由がないわけではないでしょ？」

「ただ学校くのがめんどくさくなったただだよ」

あたしから目をそらしたコウスケは明らかに嘘をついている。

「本当の理由を言って」

あたしはコウスケを睨んで言った。

コウスケもあたしを見た。

しばらく無音の会話が続く。

『言いなさい』

『理由なんてないって』

『そんなわけない』

『本当だって』

『早く言え』……

「わかったよ」

コウスケがため息混じりに降参した。

「兄貴がさ、壊れたんだよ。だから学校なんて来てる場合じゃねえんだ」

壊れたって何…？

「どついう事？」

コウスケは黙ってしまった。

聞いてはいけない事を聞いてしまったような気がする。

「薬」

「薬……」

あたしは……すごい告白をさせてしまったのではないだろうか。

こんなに身近な所にまだジャンキーがいるなんて……

「あたし……あなたの相談に乗れるよ」

「無理しなくていいよ。あんまり関わらない方がいい」

あたしなら、本当にコウスケの話を聞いてあげられる。

助けてあげられるかもしれない。

「そういう訳にはいかない。あたしはあなたの担任なんだから」

「担任？」

コウスケは首を傾げ、いつもより多くまばたきをした。

「柳先生ね、蒸発しちゃったんだって。だから今日からあたしがあなたのクラスの担任になったの。でも、他の子には柳先生は病気だつて言つてあるから内緒ね」

「ふうん」

柳の蒸発話には興味がないらしく、正面を向いてしまった。

「ねえ」

コウスケがもう一度あたしを見てくれればいいな、と思いながら話しかけた。

「ん？」

こっちを向いてくれた。

あたしの心臓はまた小さく跳ね上がった。

「学校…やめないで？」

自分でも驚くくらい情けない声が出た。

顔が赤くなるのを感じて、すごく恥ずかしくなった。

すると、コウスケがあたしの頭に手を置いた。

「そんなに悲しい声出さないで。

兄貴の事がなかったとしても、そのうちやめてたと思うよ。

だって俺、頭もそんなに良くないし、教師たちにもいいように思われてないし、ここにいたって意味がない。

だから、ごめんね」

今の状況、どっちがガキだかわからない。

「他の先生がどう思っても、あたしにはあなたが必要よ。」

あなたが本当はすごく優しいって事も、面倒見がいいって事も知ってる。

だから……」

コウスケはあたしを自分の胸に引き寄せ、がっちりと抱き締めて笑った。

「なんでそんなに必死なの」

そう言いながらケラケラ笑っているコウスケを見て、あたしは少し腹が立った。

でも、タバコの匂いとほんのり甘い匂いが混ざり合っているコウスケの制服の香りが懐かしく、居心地がよかったのでなかなか離れられなかった。

離れたく…なかった。

「じゃあ、やめない?」

なんだか今日は、いつもの自分でいられない。

「もうちょつとがんばってみるかな。あんたが担任なら少しは楽しくなりそうだしな」

「よかった。じゃあ、何かあったらあたしに言ってね」

「わかったよ」

コウスケはあたしを離し、立ち上がった。

ズボンについた砂をはらっている。

その時、おしりのポケットから何かが見えた。

あゝ忘れてた。

「とりあえず、コレは没収ね」

あたしはコウスケのおしりのポケットからタバコの箱をスツと取り出した。

「なんだよ、今更」

「一応これも仕事だから」

理解

「お前はクズだな。ゴミだな。サル以下だな」

中年の男が制服姿の少女に暴言を吐いている。

男の手は、少女の首根っこをつかんだままだ。

「なんであんなにそこまで言われなきゃなんないのかわかんないんだけど。あんた、何様？」

少女も負けずに暴言を吐いている。

「その態度は何なんだ?! お前、自分がやった事全く反省してないようだな。わかってるのか?! お前は校則以前に法律を無視してるんだぞ!」

男の言葉を聞いて、少女はキレた。

「お前耳付いてねえのかよ！やってねえってさっきから何回言った
と思っただ！お前の脳みそはミジンコ以下か！」

そう言いながら少女は自分のこめかみの辺りを人差し指でコツコツ
たたいた。

「お前！いいかげんにしろ！！」

男は少女の頬を目掛けて、勢いよく拳を振り上げた。

その拳を見た少女は怖じ気づくどころか、ニヤリと笑った。

少女のその表情を見た男の方が怖じ気づいたくらいだ。

「さっさと殴れよ。どうせ出来ねえんだろ？自分の立場が大事だも
んなあ、尾田センセ？」

尾田の額には血管が浮き出ている。

破裂寸前のようなだ。

理性を失いかけている尾田は、再び拳を振りかざした。

それでも少女は平然としている。

まるで、殴られるのを待っているかのように。

「何をやってるんですか？」

尾田とは別の声だ。

その声の主は、尾田が振り上げた手の手首をしっかりとつかんでいる。

背は尾田より頭一個分くらい高く、尾田にしてみればとてつもない
圧迫感があるに違いない。

「南條……」

少女は眉間にしわを寄せ、そうつぶやいた。

「尾田先生。この子に何をしようとしてたんですか？」

「い、いやあ……別に何も……」

尾田の額には血管のかわりに大量の汗が噴き出している。

「だったら、僕が今つかんでるこの手はなんなんでしょうね」

「た、ただのびをしていただけですよ！」

尾田は南條の手を振り払い、走り去っていった。

「あんなに言い訳が下手な奴見たことねえよ」

南條は尾田の背中を見送りながらそう言うと、すぐに少女の方に向き直った。

「で？お前、今度は何やらかした？」

少女は小さく舌打ちをした。

「なんもやってねえよ」

南條は少女の頭を鷲掴みにし、ワサワサと揺らし始めた。

「だったらあのおっさん、なんであんな怒ってたんだよ?。」

「あいつが勝手に勘違いしてるだけ。つつつか、頭離せ。酔っ」

南條は少女の頭から手を離し、今度は少女の目を覗き込んだ。

「勘違いって?。」

少女は南條から目を離し、そっぽを向いた。

「お前がその気なら、今日も俺の部屋決定な」

「はあ? またかよ?! お前の部屋きたねえからやなんだよ」

「じゃあお前が掃除しろよ」

「絶対やだ。あんた、女いないの？」

「いたらお前なんか部屋に入れねえよ」

「今のム力ついたから今日行かねえ」

「お前、来なかったら…」

「なんだよ？」

「教科書隠すぞ」

「お前はガキかよ」

「まっ、とにかく来いよ」

少女はふてくされた表情にはなっているが、心底拒んでいるようには見えなかった。

南條の自宅。

マンション自体はいい物件なんだろうけど、もうなんと云うか、台無しだ。

カップラーメンのカップやビールの空き缶が転がっていたり、使った食器がそのままシンクに置いてあったり、脱いだ服が散らばっていたりでもう大惨事である。

「片づけるよ」

少女は周りを見回しながら言った。

「お前がやれよ」

自分で片づける気はこれっぽっちもないようだ。

しばらくすると、南條が大きめのマグカップを2つもって少女の隣に腰をおろした。

「飲め」

そのうちの1つを少女に差し出すと、南條は少女に優しい笑顔を見た。

「何があつたんだ？」

南條の問いを無視し、少女はカップに入ったコーヒーを少し飲んだ。

「甘い」

「話はぐらかすんじゃないよ。お前、尾田に殴られそうになってた
だろ？まあ、俺にはお前がふっかけたように見えたけどな」

少女は、持っていたマグカップをテーブルの上にそっとおくと、口を開いた。

「昨日の夜、駅前のカラオケで乱闘騒ぎがあったんだって。

だから尾田は、それを先陣きってやったのがあたしだって勝手に決めつけてんだよ。

あたしは関係ないって言っても全く信じなかった…」

南條は真剣な表情で少女の話を聞いていた。

「お前の普段の行いが悪いから、いざって時に疑われるんだ」

そう言った南條を、少女はものすごい眼力で睨んだ。

「なんてくだらない事、俺は言わねえよ。

生徒の行いや態度が普段どんなに悪くても、信じ続けるのが教師の

役目だと思っただけだなあ。

なんで他の教師はそれがわかんねえんだろうな」

少女はホツとしたようだ。

やはり南條は他の教師とは違う。

少女はほんのわずかに微笑むと、またカップを手に取った。

「でもさ、教師なんてそんなもんなんじゃねえの？お前が変なんだよ」

「ガキにそんな風に思われてんなら教師なんて意味ねえな。

でもな、お前らも変わってくんなきゃ俺らも変われねえよ。

最初から諦めたような目で見てるから、教師もお前らの事信じられ

なくなっ てんじゃ ねえかな」

南條は悲しい目で少女を見た。

「あたしらはさ、教師だから信じてないって訳じゃないんだよ。

大人は誰も信じない。

両親だっ て一緒」

少女は、悲しそうでもなく怒っているようでもなく、ただ無表情でそう言った。

「だっ たら、まず俺を信じてみないか？

俺、お前の為ならなんでもする。

ウソはつかない。

だからさ、何かにム力ついた時とか悪い事しなくなった時とか俺ん
とこ来いよ。

いつでも話聞いてやる。

お前の味方になってやるから。

お前はさ、大人たちに信じてもらえないのが悔しくて、自分をもっ
とちゃんと見てほしくて、だから大人に反抗してるんだよな？

本当はかまってほしいんだよな？

心開いてちゃんと話したいんだよな？

俺は知ってるよ。

お前が本当はすごいいい子だって事。お父さんの事もお母さんの事
も大好きだって事。

いっぱい友達がほしいって事。

勉強だってやれば出来るって事。素直になりたいって事」

少女は泣いていた。

ポロポロと滴り落ちる涙の粒は、少女がこれまでずっと閉じていた心の扉の破片なのかもしれない。

「あたしの事…

いままで誰もわかってくれなかったのに…

なんで？」

南條は号泣している少女をフワリと抱くと、背中をさすりながらこう言った。

「今のお前が、昔の俺に似てるんだよ。」

だから今お前が何を考えてるのかとか、どうしてほしいかとかすぐわかる。

でもな、他の大人たちにはお前の口からちゃんと伝わらないと伝わらない。

全部自分で言わないと。

助けてほしい時は助けてほしいって素直に言ってみな。

絶対に助けてくれる。

お前を大事に思ってる人はお前が気付いてないだけで、たくさんいるんだから。

俺も含めてな」

少女は声を上げて泣き始めた。

今まで我慢してきたものを全て吐き出すように。

南條はそれ以上は何も言わず、泣きじゃくる少女の背中をさすり続けた。

しばらくして、落ち着きを取り戻した少女が小さな小さな声で言った。

「素直に…なりたい」

「そうか。」

だったら友達を作ってみようか。

毎日1分でもいいから学校に來い。

そうすればきっと、自然に話が出るようになるよ。

一緒にがんばろうな」

少女は南條の腕の中で小さくうなずいた。

敵意

500mlのミネラルウォーターを飲むと、さわやかな気分になった。

トーストと少しのフルーツと牛乳を胃にかき込み、歯を磨き、髪を整え、早々と家を出る。

いつもの道のりを辿って学校に到着。

職員室に入ると、なんだかイヤな気分になった。

他の先生達もいつもと同じだし、周りの風景もいつもとなんら変わりはない。

ただ…

なんとなく空気というかオーラというか、そういうものに違和感を感じた。

あたしのシックスセンス？

「おはようございます」

先生たちが声をかけてくれる。

これもいつも通り。

「おはようございます」

あたしも挨拶を返す。

やっぱりおかしい事なんてない。

あたしの勘違いだったのかな…

そう思い直した時に、突然異臭が鼻をついた。

自分の机に近づいていくにつれて臭いがキツくなる。

何？

何なの？

あたしは鼻と口を自分の左手で押さえて、恐る恐る引き出しを開けてみた。

「
うっ
」

そこには信じられない物体があった。

うさぎの死骸。

おそらく、この学校で飼育されていたうさぎだろう。

「カヅキ？どうした？」

高校時代からの友達で、体育教師の徳沢アラタが言った。

奇跡的に同じ学校に配属されたすぐく信頼出来るやつ。

「引き出し... ぐちゃね...」

それしか言えなかった。

「引き出し？うさぎ？」

意味わかんねえ、とでも言いたそうな表情であたしの机の引き出しの中をのぞき込んだ。

「なんだ、コレ……」

アラタも少しショックを受けているようだ。

それでも倒れそうなたたしの体を支え、気遣ってくれている。

「お前、授業出来るか？」

「大丈夫……」

「大丈夫そうじゃないよ。とりあえず1限目は保健室で休んでな。」

コイツは俺がなんとかしとくからさ」

「わかった。ありがとう…」

アラタはあたしの体を軽々と抱き上げ、そのまま小走りで保健室まで運んでくれた。

1限目終了のチャイムで目が覚めた。

この1時間爆睡していたようだ。

まだイマイチ起ききっていない頭でボーっとしていると、保健室のドアが開く音がした。

「カヅキちゃん、大丈夫？具合悪いって聞いたよ」

連城ツバキだ。

泣きそうな顔をしている。

すごく心配してくれているみたい。

「風邪？」

ツバキの隣には狭間コウスケもいる。

「ちょっと気分悪くなったただだから、もう大丈夫。次のあなたたちの授業には出るから」

あたしがベッドから起き上がろうとすると、コウスケがあたしの頭を枕に抑えつけた。

「何？」

「無理すんなよ。まだ顔色も悪いし、まだ寝てな」

「いやよ。こんな事で負けない」

「何と戦ってたよ。いいから寝てなつて。言うこと聞かないと泣かすよ」

「あたし、子供じゃないんだけど」

「たいして変わんないだろ」

「立派な大人よ。授業行くんだから離して!」

「そうやってすぐムキになるから子供だって言ってるんだよ」

「ムカつく」

あたしたちの会話を横で聞いているツバキは、1人でケラケラ笑っている。

「なんか、カヅキちゃんのイメージ変わった。もっとクールな人だ
と思ってたけど、意外にかわいいんだね」

かわいいなんて言われたのは久しぶりだろうか。

覚えてねえや。

「なあ、ツバキ。ちょっと先生と2人にしてくれない？話したい事
あつてさ」

コウスケがそう言うと、ツバキは一瞬険しい表情になって、それか
らまた笑顔になった。

「わかった。でももうすぐ次の授業始まるから急いでね」

「ああ」

ツバキは、あたしに『お大事に』と一声掛け、保健室から出て行った。

「話って？」

コウスケはなんとも言えない表情であたしをジッと見つめた。

「先生さ、ガキの頃どんなだった？」

意図の窺えないこの質問にどう答えるべきか。

でも、ウソをつく必要性も感じないので正直に答える事にした。

「悪ガキ」

単刀直入に言つとそういう事なのだが、今こうして改めて自覚する

と吐き気がする。

あの頃は本当にバカだったな。

「本当？」

コウスケの反応に必死さを感じた。

あたしが悪ガキだったってだいたいわかってたんじゃないの？

「本当だけど、それがどうしたの？」

「まだそっちは質問しないで。とりあえず、俺の質問に答えてほしい」

一体なんだっていうの？

だけど、ちゃんと話を聞いてやるべきだろうと思った。

「わかった。なんでも答えるよ」

コウスケは安心したように数回頷いた。

「やっぱり悪い事した？」

「そりゃあまあ、それなりに」

あたし昔何やったっけ？

いろいろやらかしすぎて思い出せない。

「例えば？」

「今それ考えてたんだよね。」

ああ…

センセイ殴り倒して逃げた事もあるし、テレビ万引きしたり、あとは言えない事も多々」

自分で言っ て恥ずかしく なった。

あたしは何をしていたんだ…

救えないバカだな…

「じゃあ、薬も？」

コウスケが何を言いたいのかがやっとわかってきた。

兄貴の事を相談したいのだろう。

「やってないって言ったら、ウソになるかもしれない」

隠そうと思えば隠せた過去の話をコウスケにしてしまったのはなぜだろう……

「だったら、ジャンキーを助ける方法知ってる？」

ジャンキーを助ける方法？

そんな方法はないに等しい。

ある一つの方法を除けば。

「あるとすれば、本人の意志の強さよ。」

でも、意志が強いなら、最初から薬に負けたりしない。

薬なんかに頼ったりしないで、自分の力だけで生きていけるはずだもの。

ただ……」

「ただ？」

コウスケはあたしに少し顔を近づけた。

「周りの人間がどれだけその人を想っているかで、生きるか死ぬか決まる事もある。」

もちろん、ジャンキー本人にも強い思いがないとダメだけど」

「そついう経験があるの？」

コウスケのその質問には、言葉の代わりに苦笑を向けた。「だって、ジャンキーを助ける方法知ってる？」

ジャンキーを助ける方法？

そんな方法はないに等しい。

ある一つの方法を除けば。

「あるとすれば、本人の意志の強さよ。

でも、意志が強いなら、最初から薬に負けたりしない。

薬なんかに関わったりしないで、自分の力だけで生きていけるはずだもの。

ただ…」

「ただ？」

コウスケはあたしに少し顔を近づけた。

「周りの人間がどれだけその人を想っているかで、生きるか死ぬか決まる事もある。」

もちろん、ジャンキー本人にも強い思いがないとダメだけど」

「そついう経験があるの？」

コウスケのその質問には、言葉の代わりに苦笑を向けた。

「そろそろこつちからも質問していい？」

あたしの真剣な表情を見ると、コウスケは黙って頷いた。

「お兄さんを、助けたいのよね？」

「兄貴、もう本当にヤバいと思う。だから、どうにかして助けてやりたい」

ジャンキーを救う事は、救う側にとってもほとんど命がけになる。

生半可な精神力では出来ないのだ。

コウスケにはそれに耐える覚悟はあるのだろうか。

「最後までやれる？」

もし途中で投げ出したら、お兄さん今まで以上にダメになってしまうかもしれない。

それに、あなたも辛いよ」

「わかってる。

それでも助けたいんだ。

薬に負けるような最低なやつだけど…

でも俺の兄貴だから。

家族だから」

コウスケがそう答えた時、授業開始のチャイムが校舎中に鳴り響いた。

「次の授業に出る気、ある？」

あるわけないとわかりつつ、念の為質問してみた。

「ない」

「だろうね。あたしも次の授業ブチるから」

「教師がそんな事言ったらマズいだろ」

まだ何の解決法もみつかっていないのに、コウスケの表情は少し明るくなった。

一人で抱え込んでいたものを他人に打ち明ける事で、少しは荷が軽くなったのだろう。

この子は、昔のあたしに本当によく似ている。

だからあたしはこの子をどうしても放っておけないんだ。

それ以外の感情はない。

…はず。

「いいから、いいから。それより、場所変えようか。保健の先生いつ戻ってくるかわからないからさ」

「あんたはここにいないとマズいんじゃない？」

「まあ、なんとかなるでしょ」

そう言ったあとに、アラタの顔が頭に浮かんだ。

きつとあいつがなんとかしてくれる。

あたし達が移動してきた場所はやっぱり、立ち入り禁止の屋上だった。

ここが一番落ち着く。

「じゃあ、話して」

コウスケは小さく頷いた。

「兄貴が薬をやってるって気づいたのは、俺が中学から高校に上がる頃だったと思う。」

その頃はまだ正常に近い状態だったんだ。

俺に対しても優しくかったし、ちゃんと仕事もしてた」

「何の仕事してたの？」

「ホスト」

「へえ。じゃあお兄さん、かつこいいんだ」

あたしがそう言つと、コウスケの緑色の瞳が輝いた。

「うん。」

兄貴はかつこよくて、気が利いて、優しくて、すごくマメで、店で

もすごい人気だったらしい。

俺の憧れなんだ」

コウスケは自慢げにお兄さんの話をした。

自分の身内をこれだけ誉められるのはすごいと思う。「だったら、
どうして薬なんかに手を出したんだろうね」

「ホストになるずっと前からやってたんだと思う。

薬を買う金を稼ぐ為にホストになったんじゃないかな。

俺が気付く何年も前からやってたのかもしれない。

もっと早く気付いてれば……」

あたしはコウスケの頭を後ろからはたいた。

「今お前が自分の事責めたって状況は変わんねえんだから、後ろ向きになるな」

コウスケは驚いた顔であたしを見ている。

もういい。

仮の姿は疲れた。

「あんたの前ではセンセイの顔してらんない。あたしはもともとこんなんだから」

これからはコウスケと腹を割って付き合っていこうと思った。

こんな大きな問題、『センセイ』では無理だ。

「その方がいい」

コウスケはすんなりと『あたし』を受け入れた。

「でさ、あんたお兄さんの為になんかした？」

「薬取り上げて便所に流した事もあるんだけど、まだいっぱいもってるし、俺の事殴るしでさ…」

それでも何回か繰り返してみたけど、いくらでも新しいのが手に入るんだよ」

「薬ってそういうもんなんだよ。」

こっちが必死でやめさせようとしても、向こうも負けないくらい必死だから。

死ぬ気になんなきゃ止められない」

「わかってる。それぐらいの覚悟はもう出来てるから」

コウスケの顔からは本物の覚悟を感じ取ることが出来た。

間違いなく本気だ。

だったらあたしも本気で協力しようじゃねえか。

あたしは…

もう誰も薬の犠牲になってほしくない…

あたしはコウスケの答えに大きくうなずき、次の質問に移った。

「お兄さんの名前は？」

転落

「お前、最近どう？」

少年が少女に問う。

「どうって何が？」

少女が少年に問い返す。

「そんなもん決まってるだろ。アレだよ」

少女は少年が何の話をしているのかわかったようだ。

「あー、うん。まあ」

「足りなくなったらいつでも言えよ」

少女は少年の顔を見ずにうなずいた。

少年はニヤリと笑う。

「俺さあ、最近ふかすだけじゃダメなんだよね」

少女の顔が引きつる。

「あんた、もしかしてポンプでやってんの？」

少年の笑顔が広がる。

それが答えのようだ。

「お前もやる？」

「いい。あたしは今のまんまがトべるから」

「ふうん。針いっぱいあるから、やりたくなったら言えよ」

「うん…」

少年は少女の目の前で注射器を取り出し、慣れた様子で自分の左腕に迷うことなく打った。

中のモノを全て注入し終わると、空を仰ぎ、薄く白目をむいて気持ちよさげに息を吐いた。

「マジ最高…」

少女はそんな少年の様子を見て複雑な表情を見せた。

「ねえ」

少女が少年を呼んだ。

「何だよ」

少年が返事をする。

「あんた将来どうすんの？学校行つてなくて、働いてもいない。このままだと墜ちるだけだよ」

少年はまた少し笑った。

「お前も似たようなもんだろ。」

一応学校は行ってるみてえだけど、お前なんか俺と一緒に誰からも相手にされない。

俺たちに将来なんてねえんだよ。

だからさ、ずっと俺と一緒にいろよ」

少女は返事が出来なかった。

少年とずっと一緒にいる気なんてなかったから。

「お前、自分だけ抜けようとしてるわけ？」

少女はまだ何も言わない。

「何なんだよ！」

「だって……」

少女は何かを言いかけ途中でやめてしまった。

「だって…何だよ」

「だって…あんた、ヤクザとつながってるんでしょ?」

少年が目をそらした。

「知らねえよ」

少年は否定したが、少女にはそれがウソだとわかっていた。

「だったら何で目そらすんだよ。」

あたしが知らないとも思ってたの?

ずいぶん前から知ってるよ。

岩佐木組でしょ？

あそこはマジヤバいから、切った方がいい」

「なんでお前にそんな事言われなきゃなんねえんだよ！！」

少年がキレた。

だが、少女はそれ以上にキレた。

「たまにはあたしの言うこと聞けよ！！」

お前の事心配してやってんだろ！！

岩佐木はなあ、もう警察に目付けられてんだよ！！

お前、出入りしててなんでわかんねんだ！

バカか！」

少年は少女の剣幕に驚いていた。

「お前…なんで岩佐木組にサツが張ってるって知ってるんだよ」

少女はその理由を言いたくないようだ。

しかし、少年はジッと見つめている。

「わかった、言うよ…」

少女は少年の視線に勝てなかった。

「あたしのオヤジ……警察なんだ」

「マジ……かよ……」

少女はうなづく。

少年は驚いて何も言えない。

「だからさ、ヤクザには関わらないで。あんたはパクられてほしくないんだよ」

「わかった…」

少年は少女の前からゆっくりと立ち去っていった。

変化

携帯電話の明るいう着信メロディーで目が覚めた。

いやいや、まだ6時だけでも。

画面を見ると、父親の名前が表示されている。

親父かよ。

舌打ちをしたくなった。でもまあ、とりあえず出てみるか。

二つ折りの携帯を開き、通話ボタンを押した。

「もしもし」

「カヅ…か？」

雑音が入って聞き取りにくい。

「あたしの携帯なんだからあたししか出ないよ。で、何？どしたの？」

「別に用事はないんだ。ただちょっとお前の声が聞きたくなってな。元気か？」

耳障りな雑音が消えて、父親の声がクリアになった。

やっぱり、家族の声を聞くとホッとする。

昔はそんな事絶対思わなかったけど。

「うん、元気。父さんは？」

優しい声になっているのが自分でもハッキリとわかる。

「元気だよ。キョウカもな。お前さあ、たまにはこっち帰ってこいよ。父さん寂しい」

「気持ちわりいよ。」

まあそのうち帰るから。
近いしね。

それより、キョウカとケンカすんじゃないぞ。

どうせ父さんが負けるんだから」

電話越しに父親の笑い声が聞こえた。

「俺はお前にもキョウカにも勝てねえからな。じゃあ、また電話するから。気つけて学校行けよ」

「わかってるよ。じゃあ」

あたしはゆっくりと二つ折り携帯を閉じた。

父親との会話に出演していた『キョウカ』とは我が母である。

小さい頃から母は、あたしに『ママ』とか『お母さん』とは呼ばせなかった。

意味はわからないが、なんだか友達みたいでけっこう気に入っている。

朝から父さんの声が聞けて急に元気が出て来た。

親父パワーはいろんな意味ですげえな。

学校に着くと、すぐにアラタに声をかけられた。

「おい」

完全に怒っている。

「はい？」

アラタは自慢の長身で目一杯あたしを見下ろした。

「お前、結局昨日一つも授業出てねえじゃねえか。保健室にもいないし、どこ行ってたんだよ」

あー。

それか。

「もうなんか、ホントやる気なくなっただから家に帰ってしまいました。ごめんなさい」

アラタはため息をついた。

そりゃそうか。

教師が勝手に帰っちゃマズいよな。

「とりあえず、俺がお前を連れて帰ったって事にしたら。口裏合
わせるよ」

「ありがとうございます。徳沢センセ」

アラタは優しく笑ってくれた。

コイツは昔からこういう奴だった。

あたしがウソをついている事をわかっているのに、あたしから話さない限り絶対に聞き出そうとはしない。

いつも支えてくれる。

「今日の昼飯、お前持ちだから」

ちっ。

あたしはまだカバンを持ったままだったので、自分の机に向かった。

…またか！

昨日と同じように異臭があたしの鼻をついた。

あたしの異変に気付いたアラタが、駆け寄ってくる。

「どうした？」

そう言ったすぐあとに、アラタも臭いに気がついたようだ。

アラタは引き出しの取っ手に手をかけ、一気に引いた。

「またか…」

今度入っていたのは、うさぎではなく真っ黒なカラス。

「今度は平気？」

心配してくれているようだ。

「2度も倒れてらんないよ」

「そうか」

アラタはそう言ったあとすぐに、何かを考え始めた。

アラタが何を考えているのか、あたしにはわかる。

あたしも同じ事を考えていたから。

「あたしたち、教師として最低な事考えてるよね」

「そうだけど、それ以外には思いつかない」

「でも…あたしはやだな。そんな風に思いたくない」

「俺もだよ」

あたしたちが考えていた事。

それは、あたしに対してのいやがらせ行為をやった犯人が生徒の中にいるんじゃないかって事。

本当は、こんな事考えたくない。

生徒は教師に疑われると、ものすごく傷つくという事をあたしもアラタも知っているから。

だけど、疑わずにはられないこの状況が悔しくてたまらない。

「今日は自分で片付けるから」

あたしは、自分のハンカチでカラスの死骸をつつみ、職員室を出た。

カラスを校庭の隅っこに埋めていると、胸が苦しくなった。

あたしを困らせる為に、誰かの手によって殺されたなんの罪もない動物達に申し訳ないという気持ちのせいだ。

一体自分は誰に何をしたのだろう…

とにかく、あたしは絶対に犯人を見つけないといけないと思った。

命をなくしたうさぎやカラスの為に。

2つの命を奪ったという事を反省させなければならない。

償わせなければならない。

最近の子供たちや一部の大人は命の重さというものをわかっていない。

平気で子犬を殴ったり蹴ったり…

平気で子猫を殺したり…

平気で我が子を手にかけたり…

あたしは昔身近な人間を何人も失った。

理由は様々だが、とにかく死んだ…

だから、あたしは命の重さを知ってるよ。

誰かが死ねば、誰かが悲しい。

その事をみんなにわかってほしい。

あたしは、胸に深い思いを抱えながら、一限目の授業に向かう為立ち上がった。

すると、あたしの直後ろにコウスケが立っていた。

「何してんの？」

心配そうな眼差しだった。

あたしはコウスケから目をそらした。

「別に…なんでもない。もうすぐホームルーム始まるから、教室行きな」

コウスケは納得していないようだったが、それ以上は何も言わずに教室に向かってくれた。

あたしが教室に着くと、やはりいつものようにざわざわと騒がしかった。

今日はかえってそれがあたしを安心させた。

いつもと変わらないこの光景がありがたい。

朝から重い考え事をしたせいか、体がだるかった。

何度もため息が出る。

にも関わらず、ドアを開けるとすぐに矢崎ユウリがあたしを罵倒した。

「またあんた？ウザい。引っ込め」

今のあたしは、ユウリに対して腹を立てる事はなかった。

「ユウリ、今日はやめとけ。見てわかるだろ？先生、調子悪いんだよ」

コウスケだった。

コウスケはいつもあたしを庇ってくれる…

味方でいてくれる…

気持ちが悪くなる時って自分を守ってくれている人に気がつくよね。

自分を支えてくれてる人を大事に思えるよね。

「コウスケ… あんた、いつもあいつの味方だね」

ユウリがうなだれた表情で言った。

「くだらねえ事言ってるじゃねえよ」

「やめなさい。ホームルーム出来ないでしょ」

2人のケンカを止めると、今日の連絡事項を言い、あたしはさっさと教室を出た。

3時限目。

コウスケのクラスの授業だ。

ユウリにからまれる事を少しめんどくさいとおもいながら、音楽室に向かった。

ドアを開けようとしても、やっぱり素直に開いてくれない。

コウスケに教えてもらった通りに、思い切りドアを蹴った。

すると、ガコッという音がして、ドアが開いた。教室内は一瞬静かになる。

だから、気まずいって。

「またお前かよ」

こっちのセリフだよ。

さっきまでの落ちた気分が治ってきたのか、ユウリの発言を少し不快に思えた。

それもなんだかおかしな話だけど。

ユウリは隣の席の女子生徒と、あたしを見ながら何やらコソコソと話始めた。

感じわりいな、おい。

「いい加減にしろよ！見てることがちが気分悪くなんだよ！」

ユウリを止めてくれたのはやっぱりコウスケだった。

でも今回は他の男子生徒や一部の女子生徒も賛同している。

「そついう事は中学で卒業しろよな」

そう言ったのは、コウスケとも仲の良い男子生徒の槇岩ハルだった。

ハルはこのクラスでは比較的大人しい方で、あたしの言うことも素直に聞いてくれる数少ない生徒の1人だ。

あたしの味方をしてくれるのが男ばかりだから、余計にユウリに嫌われるのかもしれないな。

「ハルには言われたくない。いつも見て見ぬフリしてたクセに。ムカつくんだけど」

ユウリは怒りの表情を露わにしていた。

あんたたちはあたしの授業の時は決まってケンカすんだね。

時間通りに始められたためしがないよ。

まったく。

「ムカついてんのは俺らの方だよ。ガキじゃねえんだからちょっとは落ち着けよ」

ユウリはハルを思い切り睨んだ。

そのあとすぐに、あたしも睨まれた。

あーもう。

「あたしは別に気にしてないから。

矢崎さんがあたしの事嫌いなんだったらそれはもうしょうがない。

あたしだって昔は教師なんか大っ嫌いだったし。

殺してやるうかと思っただくらい」

教室内がスーッと静かになった。

へ？

あたし、なんか変な事言っただけ？

「カヅキちゃん…なんかいつもと違うけど…」

ツバキが不思議そうな顔で言った。

あたし、いつもどんなんだっけ？

キャラ設定が曖昧になってしまった。

さて、どうしたもんか。

ふとコウスケに目を向けると、明らかに笑いをこらえている顔だった。

『バーカ』

口パクでそう言われた。

うるせえ。

もうめんどくさい。

あたしはこれを機に全面的に『あたし』を出していくことに決めた。

「あんたたちからしたら、あたしは面白くない先生だったよね。あたしもそろそろ疲れたし、素のまんまでいいかな」

開き直った。

もしかしたら、教師だからって自分を作る必要なんて元々なかったのかもしれない。

「いいに決まってるじゃん。なあ？」

コウスケが言った。

なあ？と言われたハルも笑顔を向けてくれた。

ツバキも真っ白い歯を見せて笑っている。

クラス中がにこやかな雰囲気になった。

なんだ…

こいつらにウソつく必要なんてなかったんだ。

ちゃんと受け止めてくれるじゃないか。

これからは慣れない言葉遣いもしなくていいんだ。

少しだけ体が軽くなった気がした。

「ありがとう…はい、じゃあ授業するから」

「え〜」

教室のあちこちからブーイングの嵐。

その中にも好意を感じる。

「え〜じゃねえよ。一応教師なんだから授業はやるよ」

「今日は何するの?」

ツバキが言った。

積極的に参加してくれてホントありがとう。

「テキトーにグループ作って。4〜5人ずつで」

音楽室はまた騒がしくなった。

何をするのかわからないけれど、とりあえずワクワクしているみたいだ。

「グループ作ってどうすんの?」

今度はハルが言った。

「バンド」

「うおっ! 楽しそう!」

ハルは乗り気。

よかった。

「じゃあ、さっさとグループ作ってね」

5分後。

ほとんどグループが完成したようだ。

ただ、そのグループはそれでいいの？

コウスケ、ユウリ、ツバキ、ハル、あともう1人桐生ヤマトという男子生徒で構成されたグループ。

あんなたち、仲悪いのかいいのかどっちなのよ。

「コウスケ、ちょっと」

あたしがそう言つと、周りにいた生徒達が驚いた顔でこちらを見た。

「君ら、どついつ関係？」

ヤマトが言った。

名前で呼んだのがマズかったのかな。

「別にどついつ関係でもねえよ」

コウスケが答えた。

「いや、でもさ…」

ヤマトはまだ何か疑っている。

「そんな細かい事にすんなよ」

あたしが言っと、ヤマトは納得したようで、ハルとの会話に戻った。

「何？」

コウスケがあたしの隣にやってきた。

「あんなたちのグループはさ、大丈夫なの？毎回ケンカとかされたら困るよ」

「あゝ、大丈夫大丈夫」

えらく軽い返事だったので、大丈夫なんだなと素直に思えた。

「なあ」

コウスケの目つきが変わった。

鋭い目つき。

真剣な話をする気だ。

「はい」

「この間、俺が兄貴の名前言ったら急に態度変わったよな？」

マズい。

「気のせいじゃない？」

「絶対違う」

困った。

「今度話すから。とりあえず今日はバンドやって」

コウスケはため息をついた。

「わかったよ」

すごく物分かりのいいコウスケに感謝した。

潜入

少女は1人で公園にいた。

周りには小さな子供達とその母親達がたくさんいる。

平和な光景。

少女も小さく微笑んでいるように見える。

ユラユラ揺れるブランコに乗りながら、オレンジ色の夕日を背景に
考え事をしている少女の姿は美しい。

少女は一体今何を考えているのか。

少年の事なのか、あの魔法の粉の事なのか…

少女はふと公園の外にある歩道に目をやった。

そこには小学生が数人が楽しそうに会話をしながら歩いていた。

横断歩道を渡ろうとしている。

少女は何を考える事もなく、その子供達を見ていた。

その中の1人の男の子が横断歩道の途中で突然止まった。

どうやら、靴ひもがほどけてしまったようだ。

男の子はその場でしゃがみこみ、真剣な顔で靴ひもを直し始めた。

不器用なのか、なかなか上手く結べない。

その様子に1人の女の子が気付き、男の子に近寄っていった。

女の子は、手伝ってやるわけでもなく、ただ隣で男の子を見ている。

それが返って、2人の仲のよさを少女に感じさせた。

他の子供達はすでに横断歩道を渡りきり、反対側の歩道に到着していた。

その時、青信号が点滅し始めた。

その事に2人は気付いていないようだ。

少女は2人に危険を感じ、ブランコから立ち上がった。

猛スピードで走っている白いセダンが見える。

あのままのスピードでは止まらない。

少女は全力疾走で2人の元へ急いだ。

「危ない!!」

反対側の歩道にいる男の子がそう叫んだ。

と、ほぼ同時に少女は動けないでいる2人を抱え、一緒に道路に転がった。

「お前ら何やってんだ!」

乗用車の窓が開き、オヤジの怒鳴り声が響いた。

「うるせえ！お前だつて見えてたのにスピード緩めなかつただだろ
うが！何キ口出してんだ！ハゲ！」

少女も負けずに怒鳴り返す。

オヤジは舌打ちをし、すぐに窓を閉め、発信した。

「ありがとうございました」

少女に助けられた男の子と女の子は、2人揃って少女に頭を下げた。

「あんたたち、とりあえずこつちきな」

2人の仲間達が駆け寄ってきたが、到着する前に少女は2人の頭を一発ずつ殴った。

2人は涙目で頭を押さえている。

その場に到着した仲間達は、自分の友人が知らない人に殴られている様子をみて、啞然としていた。

「あんな所で止まってたら危ないに決まってんだろぅが！今度からは気をつけな」

「はい！」

2人は深くうなずいた。

少女は素直にかわいいと思った。

「みんなで仲良く帰るんだよ」

少女は2人の頭をなで、ニッコリと笑った。

「本当にありがとうございました！」

小学生達は小走りで去っていった。

少女は笑顔のまま見送る。

「お前、何者？」

背後から聞き覚えのある声が聞こえた。

少女は後ろを向く。

「南條」

そこには少女の担任の南條ソウタがニヤニヤしながら立っていた。

「どんだけいいヤツなんだよ。何戦隊？」

「てめえふざけんなよ！」

口調はキツいが、少女は明らかに照れている。

南條は嬉しそうだ。

「飯、おごつてやるからついてこい」

南條はなかば強引に少女を自分の車に乗せた。

「誘拐で訴えるぞ」

少女は冗談とわかるようにそう言った。

どうやら彼女はこの南條という男には逆らえないようだ。

「そんな事したらマジで誘拐するぞ」

「教師がなんて事言うんだよ」

「お前、俺の事ちゃんと教師だと思ってんだ」

「自惚れんな」

端から見ると、この2人は仲のよい兄妹のようだった。

子供っぽいが面倒見のよい兄と大人びてはいるが手のかかる妹。

少女と南條はある場所に到着した。

「おい」

少女は怒っている。

「なんだ？」

南條は平然と答える。

「飯、おごってくれるんじゃないかねえのかよ」

「そうだけど？」

「だったらなんでまたお前の部屋なんだよ！」

南條は悪びれる様子を少しも見せない。

「お前が飯作れ」

「ヤダ」

「あ、そう。じゃあ、こっから自分の家まで歩いて帰るんだな？」

南條は笑いながら少女に小さな脅しをかけた。

少女は不機嫌になったが、歩くのはいやなので渋々南條の部屋に入っていた。

出来上がった料理を差し出すと、南條の表情はそれまで以上に明るくなった。

「うまそう！これ、マジでお前が作ったの？」

南條は鶏肉のトマト煮を箸でつつきながら言った。

少女の意外な特技を知って、とても嬉しそうだ。

「そうだよ。あんた以外にあたししかいないだろ」

南條は料理に夢中で、すでに少女の話を聞いていない。

「やべ〜！うめえよ！」

マカロニサラダを口に含みながらそう言う南條は本当に子供のよう
だ。

少女は少し口元を緩める。

南條の真正面に腰を下ろし、少女も料理を食べ始めた。

料理を食べ終わり、少女は洗い物をしている。

南條は後片付けまで少女に任せ、のんびりタバコを吸っている。

少女が洗い物を済ませ、南條の隣に座った。

タバコの箱に伸びた少女の手を南條がつかむ。

「お前はダメ」

「いいじゃん」

「まあいいけど」

「いいのかよ」

だけど少女はタバコを吸わなかった。

「お前、テツって名前の男知ってるか？」

南條の突然の問いかけに、少女の心臓が激しく動いた。

少女はテツを知っている。

どうして南條がテツを知っているのか不思議に思っただった。

だが…

知っている、と言ってもいいものなのか。

「そいつがどうかしたの？」

「今は俺が質問してるんだ。答えろ」

少女が南條の真剣な表情を見たのは久しぶりだった。

話をそらすわけにはいかない。

「知ってる…」

知らないフリも出来なかった。

テツを売るか、南條にウソをつくか…

少女にはどうしても南條にウソをつく事が出来なかった。

「居場所、わかるか？」

「わからない」

それは本当だった。

でも、それを南條が素直に信じてくれるか、少女は不安になった。

「そうか」

少女は南條ソウタという男をナメていた。

この男は、少女の事を絶対に疑わない。

心底信用しているのだ。

そんな南條を少女もまた信用していた。

「テツ、何かしたの…？」

南條は下唇をかんだ。

言いにくい事がある時に必ず見せるクセだ。

「実はな、今うちの学校に薬が出入りしてるみたいなんだ。

テツが流してるらしい。

まだハッキリした事はわかってねえし、そのテツって奴が実在してるかも微妙だったんだ。

でも、お前はテツを知ってる。

という事はテツは実在してるって事だよな。

なんとかして流れを止めたい。だから、俺に協力してくれないか？」

少女は複雑な気持ちだった。

南條の手助けをしたい―でもテツを裏切るわけにもいかない―

テツに一番近い人間の自分なら確実に協力できる―

だけど…―

少女はジレンマに苦しんだ。

「頼む」

南條は床に額をつけている。

少女は南條のこんなに必死な姿を見るのは初めてだった。

テツ…

ごめん…

あたしはこの人を助けたい…

自分の学校を守りたい…

あんたの被害に合うのはあたしだけでいい…

少女は南條を選んだ。

「わかった。でも、居場所は本当にわかんないんだ」

南條はもう一度深く頭を下げ、しっかりした表情で顔を上げた。

「ヤツがよく行って場所ならわかるか？」

少女は少し考え、何かに思い当たった。

「岩佐木組……」

南條はぎょつとした顔で少女を見た。

「マジかよ?! 思いつ切りヤクザじゃねえか!」

「何? ビビってんの?」

少女はニヤリと笑う。

「バーカ！ビビってなんかいねえよ」

「ふうん」

少女はまだ疑っているようだが、南條をからかっている場合でもないでそれ以上は何もいわなかった。

「岩佐木組の本拠地、どこか知ってるか？」

生徒にヤクザの本拠地の場所を尋ねる教師がどこにいるんだ。

「知ってるわけねえだろ。でも、調べてみようか？」

「調べられんの？」

南條は興味深そうに少女の顔を覗き込んだ。

そして、気づいた。

「お前の親父さん、警察だったよな」

「いや、この場合は親父よりも…」

「他にも情報源がいるのか？」

「まあな」

「それは助かる。じゃ、頼むよ」

「任して」

2日後。

少女は初めて自分から南條の部屋を訪ねた。

前もって連絡をしている訳でもなかったので、いるかないかもわからない状態での訪問だった。

エレベーターに乗り込み、『5』のボタンを押す。

エレベーターはカタカタと音をたてて、ゆっくりと上がっていった。

『南條』と書かれた表札があるドアの前に立つと、少女は少しだけ緊張した。

何度も来ているはずなのに。

インターホンを押すと、外にも聞こえるくらいの音がした。

中からは何の反応もない。

少女が「いないのか…」とつぶやいた時に、南條の全くやる気の無い声が聞こえた。

「だれ？」

「あたしだけど」

少女はあえて名乗らずにそう言った。

「お前か。開いてるから入れ」

南條は軽い声で言った。

少女はドアを開け、中に入った。

相変わらず汚い部屋。

玄関を上がると、南條は寝そべってテレビを見ていた。

「だらけすぎだろ」

「別にいいだろ。俺の部屋なんだから」

「まあ、どうでもいいけど」

少女が本当にどうでもよさそうに言うと、南條はテレビを消し、起き上がった。

「なんか飲むか？」

少女はうなづく。

南條は、すぐに2つのカップを持って台所から戻ってきた。

1つのカップを少女に差し出す。

温かいミルクティー。

「テツの居場所、わかったのか？」

少女は首を横に振る。

「それはまだわかんないけど、岩佐木組の本拠地ならわかった」

南條は驚いた表情を見せた。

「お前、すげえな。仕事早いし。で、岩佐木さんはどこでお仕事してらっしゃるの？」

少女はその場所を口にした。

「うわゝ、なんていうか…まんまだな」

少女は不安そうな顔を見せた。

南條はすぐにそれに気がつく。

「どうした？」

少女は一度うつむき、再び南條の顔を見た。

「岩佐木組の本拠地なんて聞いてどうすんの？乗り込もうと思うっ

てないよね？」

南條は少女に真剣な眼差しを向け、すぐにニツコリと笑った。

「心配すんな」

少女は南條のその言葉を聞いて、一気に泣き顔になった。

「あんた何考えてんの？！バカじゃない？！相手は岩佐木だよ！！
ただの教師がヤクザに勝てるわけないじゃん！！」

少女は南條に岩佐木組の本拠地を教えたことを後悔した。

南條はまだ笑ったままだ。

折れないモノを心に秘めているような表情。

「勝てるとは思ってねえよ。」

でも負けるとも思っていない。

やってみなきゃわかんねえしな。

でもな、俺は戦いに行くわけじゃねえぞ。

ただテツを見つけ出したいだけだ。

俺はさ、誰が何と言おうが教師だ。

自分の学校を守りたいと思うのが当然だろ。

薬なんかに侵されてたまるか！

生徒達が何よりも大事だから」

南條は、正義感とか使命感とかそんなものでこんな無謀な事を言っているのではない。

ただ生徒を守りたいという思いだけで言っているのだ。

少女もそのことをわかっていた。

だからこそ、南條に全面的に協力しようと決意したのだ。

「本気？」

「当然」

「だったら、いいこと教えてあげる」

「何？」

「テツが行きそうな場所、思い出したんだ」

「本当か?!どこ?!」

「ギルティー」

南條のスーツ姿は確実にカタギには見えない。

ましてや教師なんてありえない。

少女は異常に露出の多い格好をしている為、実年齢より少し大人に見える。

2人が何故このような格好をしているかという点、『ギルティー』に行く為。

『ギルティー』とは、テツが出入りしている可能性のあるクラブである。

目立つと困るので、雰囲気馴染めるような格好で来いという少女の指示に、スーツとジャージしか服を持っていない南條が出した結論がヤクザに扮装するというものだった。

このクラブでも薬の売買が行われている可能性が高いので、ヤクザがいてもおかしくないという南條の気の利いた発想に少女は驚いた。

「脱ぎたい」

ただ、問題点がある。

南條本人はスーツが苦手なのだ。

「あんた、自分で言い出したくせに何言ってるの？ここにいて間だけとりあえず我慢しろ！」

南條は小さく「はい」と言った。

入り口の真つ黒のドアには銀色で『guilt』と書いてある。

南條はその文字を見つめ、おもむろに言った。

「お前、『ギルティー』の意味わかるか？」

「わかんない」

南條はドアを睨みつけた。

いつもの穏やかな表情からは想像できないような表情だった。

「有罪」

「え？」

「『ギルティー』は有罪って意味なんだよ」

少女も南條と同じようにドアをにらみつけた。

「ピッタリだ」

店の中は薄暗く、少し肌寒い感じだった。

「お前、寒くない？」

「大丈夫」

普通の客と同じように自然に振る舞うのは意外に難しい。

2人はとりあえずカウンターに腰を落ち着ける事にした。

「何にする?」

南條が少女に聞く。

「カシスソーダ」

「そうか。じゃあ、俺は何にしよっかな」

「そうかって…いいの?」

南條は少女の方を向き、片方の眉をつりあげた。

「どうせいつも飲んでるんだろ？」

「まあ」

「それに、こんな所でジュースなんて飲んだりしたら不自然だ」

南條は少女のカシスソーダと自分のレッドアイを注文すると、辺りをキョロキョロと見回し始めた。

「だいぶ不自然だけど」

少女は呆れたように言った。

「そうか？」

「そうだよ。っていうか、あんたテツの顔知らないんだから探したってわかんないでしょ」

注文していた酒がそれぞれの前に差し出された。

レッドアイを飲んだ南條は、険しい表情になった。

「どしたの？」

「俺、酒ダメなんだ」

「じゃあなんで注文したんだよ」

「強がり」

「バカか」

そんな他愛のない会話をしていると、背後から他の客達の激しい笑い声が聞こえてきた。

少女はそれを少し不快に思い、笑い声の方に視線を向けた。

そこにはテツがいた。

少女は南條に肩を寄せ、ささやく様に言った。

「テツがいた」

南條は少女が思っているよりバカではなく、すぐに後ろを向いたり
はしなかった。

「覚えてる範囲でいいから、状況を説明してくれ」

少女は目をつむり、一瞬だけ見たテツとテツの周りの様子を頭に思
い浮かべた。

「入り口から数えて3番目のテーブル席」

男女合わせて5、6人かな。

テツは白のタンクトップに軍パン。

シルバーのネックレスもつけてると思う」

少女の観察力に南條は驚いた。

「充分だ。お前はもう後ろを向くなよ」

少女は小さくうなずいた。

南條は一瞬だけテツの方に視線を向けると、すぐに向き直った。

「アイツか……」

南條の目つきが変わった。

南條は腰を捻ったりのびをしたり、あらゆるカモフラージュをしながら、頻繁にテツの行動を見張っていた。

しばらくその状態が続くと、予想外の人物が動いた。

カウンターの向こうにいたバーテンが姿を消していたのだ。

「しまった！」

バーテンがいない事に気がついたのは南條が先だった。

少女は背後に意識を集中していた為、前方の人間が消えている事に全く気がつかなかった。

バーテンはおそらくテツの仲間。

南條と少女の会話を聞いて、それをテツに報告しに行ったに違いない。

「おい、出るぞ」

南條はテツに聞こえるか聞こえないかくらいの大きさの声で言った。

少女は南條に腕をひっぱられるようにして走る事になった。

だが、向かった先は出口ではない。

少女と南條は、出口のすぐ横にあるトイレの入り口付近に身を隠した。

「出るんじゃないの？」

「出る訳ねえだろ。何しに来たと思ってんだよ。あ、ほら見る」

南條はあごでテツの方をさした。

テツもバーテンも他の仲間達も、少女と南條の姿を探しているようだ。

2人はしばらく様子を見ていた。

すると、テツ達は少女達が店を出たと思い込んだようで、また楽しそくに騒ぎ出した。

バーテンもカウンターに戻っていった。

「これからどうすんの？」

少女は不安そうにたずねる。

「もうちょっと見張る」

南條はテツから一瞬も目を離さずに言った。

少女も素直に従った。

「たぶん、そろそろ動き出す」

「どういう事？」

「あいつら、薬の売買いつもこの店のトイレでするらしい。決まった時間にな」

「調べたの?!」

南條はニヤリと笑っただけで何も言わなかった。

少女は、南條には教師よりも合った仕事があるような気がした。

「あと5分」

時計を見ると、午後11時55分だった。

「ちょっと動くぞ」

南條は少女にギリギリ聞こえる声でそう言つと、また少女の手を引き、今度はトイレの個室に入った。

数秒後、足音が聞こえた。

さらに数秒後、もう一つ足音が聞こえた。

「どうも」

低いが軽い声が聞こえた。

若くはないようだ。

「どうも」

今度は間違いなくテツの声。

「最近、量多くない？」

「そうっスか？まだ足りないくらいっスよ」

「体は大事にしろよ」

「これがない方が俺の体ヤバくなりますよ」

2人の笑い声。

嫌な笑い。

「うちのは純度いいからねえ。そこらのは質が違っのよ。じゃ、親父さんに宜しくな」

「ういっス」

テツがそう言うと、薬を売ったと思われる男がトイレから出て行った。

今このトイレ内にいるのはテツと少女と南條の3人だけ。

少女は直感的にヤバいと思った。

少女の予感は的中した。南條は個室から飛び出し、背後からテツの口を塞いだ。

「お前がテツだよな？」

テツは何度も頷いた。

怯えている。

南條の扮装は効果抜群のようだ。

「今、薬買ったのか？」

テツはまた何度も頷く。

意外に正直なようだ。

もしくは、ただの小心者。

「誰から？」

どこにしまってあったのか、南條はテツに紙とペンを差し出した。

用意周到。

「さっさと書け」

どうやら南條はテツの首を軽くしめているようだ。

テツは震える手で紙とペンを受け取り、答えを書き始めた。

「ウソ書いたら殺すから」

南條はテツの耳元で優しくつぶやいた。

少女はその様子をずっと個室の中から見ている。

南條から、出てくるなという指示があったわけではないが、出ていってはいけない事はなんとなくわかっていたから。

テツは答えを書き終わり、紙とペンを南條に返した。

《s u g a r っていうホストクラブのオーナーから》

紙には汚い字でそう書いてある。

「薬の名前は？」

《スパーク》

「オーナーの名前は？」

《鮫崎シヨウヘイ》

「鮫崎がいった親父さんってのは、岩佐木の事か？」

テツがうなずく。

「スパークってさ、ピンク色の錠剤か？」

テツは一瞬眉間にシワを寄せた。

なんでこいつがスパークを知っているんだ？

こいつは一体誰なんだ？そんな事を考えていそうな表情だった。

テツが返事が遅いからか、南條はテツの首をしめている腕に少し力を込めた。

すると、テツは涙目になりながらコクコクとうなずいた。

その時、トイレの中に他の人間が入ってきた。

どうやらただの客のようだったが、少女は音がしないようにさっと個室のドアをしめた。

南條はテツの口を塞いだままうしろから抱き締め、顔をさらに寄せた。

今までの流れを知らない人間が南條とテツのこの体勢を見たら、確実に誤解し、そして納得するだろう。

ここはそういう店なんだ、珍しくはない、と。

南條の機転のよさに少女はまた驚かされた。

今トイレに入ってきた客は、テツと南條をチラリと見ただけで特に何の疑いも持っていないようだ。

1分もしないうちにただの客は用を済ませ、トイレから出て行った。

それを見届けた南條は、テツから少し体を離し、ただの客が入ってくる前の体勢に戻した。

「やっぱ男に抱きつくのはキツイ」

南條のその言葉を聞いて、少女はまた個室のドアを少し開けた。

少女がここにいるという事は、まだテツには気付かれていない。

《なんでスパークの事知ってた？名前は知らなかったくせに。あんた誰なんだ？》
あ

テツが南條を睨みつけながら紙を差し出した。

南條に対しての恐怖がだいぶ薄れてきたようだ。

「それをお前にいう必要はねえ。それより、お前スパークのプッシヤーだよな？高校生にも売ってるんだろ？」

テツは首を横に振った。

「ウソついたら殺すって言ったはずだけどな。もう一回聞けど。高校生にも売ってるんだろ？」

テツは、しばらく間を開けてから観念したようにゆっくりうなずいた。

「俺の妹の学校にも流れてきてて困ってんだわ。」

妹もハマっちまってさ。

お前から買ったって言ってんだけど、どうしてくれるの？」

真っ赤なウソだが、本当の正体を現すわけにもいかないの仕方ない。

《そんなの俺のせいじゃねえよ。買った妹が悪い》

「お前がいなきゃ妹は買ってない。だから全部お前のせい」

南條はさらに腕に力を入れた。

それ以上力を入れたら死んでしまう。

《わかったよ。もうその学校の生徒には売らない。どこの高校？》

「
○○学園」

《わかった》

「おんなじ事やりやがったら、お前の安全保障できねえから」

《約束する》

南條はテツに差し出された紙をじっとみつめ、テツの首と口に置いてある手を離した。

テツは豪快に咳き込んだ。

その時、トイレ内にガタツという大きな音が響き渡った。

南條がテツを殴ったりしなかった事に安心して気を緩めてしまった少女が、個室の中にあるゴミ箱を蹴ってしまったのだ。

出口を目前にしていたテツが、その音に振り向いた。

「何の音だ？」

テツが訝しげに聞いた。

「何でもねえ。気にすんな」

南條は言ったが、言い逃れ出来るはずもなかった。

テツは少女が入っている個室に近づいていく。

南條はテツを止める言葉が思い付かない。

少女も逃げる事は出来ない。

テツがドアを蹴ると、ダンッという音と共にドアが勢いよく開いた。

テツと少女の視線が合う。

「お前、なんでここにいる？」

脅威

冷蔵庫から500mlペットボトルのミネラルウォーターを取り出し、勢いよく飲み干した。

最近学校へ行くのが辛い。

生徒達とはいい感じなんだけど、やっぱりあのいやがらせはこたえる…

誰があんな事をしているのかも、一体なんの目的でやっているのかもわからないから気味が悪い。

朝から動物の死体なんて見せられたら、誰だってテンションだだ下がりでしょ。

でも、だからと行って学校を休むわけにもいかない。

行くしかない。

いやがらせが始まってから、あたしは毎朝いちいち決意をして学校へ行かなくてはならなくなった。

そうしないと気持ちが折れてしまいそうだったから。

軽く朝ご飯を食べ、歯を磨き、洋服に着替えて髪をセットする。

玄関で靴を履いていると自然とため息が出た。

その時、携帯電話が鳴った。

また父親かと思って画面を見たが、そうではなかった。

徳沢アラタ

いつも助けてくれるあの体育教師の名前が表示されている。

通話ボタンを押すと、通話口から威勢のいい声が聞こえてきた。

「カッヅキ！元氣かあ？？」

「あゝ」

あたしはアラタのテンションについていく事が出来ず、適当に返事をした。

「なんだ、その返し。どんだけやる気ねえんだよ。学校休むなよ。俺、今から迎えに行こうか？」

一人でいるよりいくらか気が楽になるかもしれないと思い、アラタの好意に甘える事にした。

「うん、来て」

10分後。

インターホンが鳴った。

アラタだとわかっていたので、そのまま家を出た。

「おはよ。お前、大丈夫か？」

あたしの顔色はそうとう悪かったらしく、アラタは心配そうに言った。

「大丈夫。迎えにきてくれてありがとうね」

珍しく素直に礼を言ってみた。

アラタは一瞬驚いた顔をしたが、すぐに優しい笑顔を向けた。

学校に到着して、2人で車から降りてみると、案の定生徒達にからかわれた。

「なあんだ。やっぱり付き合ってたんだあゝ。仲いいと思ってたんだよねえゝ」

あゝめんどくさい。

あたしの心情を察したのか、アラタが代わりに否定してくれた。

「ちげえよ。友達なの」

「ホントにいゝ?」

「ホント」

「でもさあゝ、徳沢は藤嶺の事好きなんでしょ? そういつウワサあったんだけどあゝ」

アラタの頬が赤くなった。

あら?

そうなの?

アラタはすごい勢いであたしの方を向いた。

「いや！違うから！」

全力で否定しなくてもいいじゃないか。

2人で職員室に入っていくと、ここでもひやかしの目で見られた。

だが、さすがは大人。

誰も何も言わなかった。

ただ、態度や視線の方が口に出して言われるよりもずっと嫌だった。

「朝倉先生、おはようございます」

アラタが、数学担当の朝倉マキにあいさつをしている。

マキは黒髪のロングヘアーで、肌の色は透き通るように白い。

背があたしよりも5センチは高くスタイル抜群。

おまけに瞳の色がやけに明るいので、黒髪でさえなかったら日本人にはみえないだろう。

たいそうな美人。

マキに比べたら、あたしなんてダルマみたいなもんだ。

「おはようございます」

マキはニツコリ笑ってアラタにあいさつを返している。

そのままの笑顔であたしの顔を見た。

「藤嶺先生、おはようございます。お二人は本当に仲がよろしいんですね」

さらに笑顔が広がる。

女のあたしでもこの笑顔で落ちそうになる。

なんてこった。

「まあ、俺がコイツの面倒見てやってるだけなんですけどね」

アラタが勝手な事を言っているが、いちいち否定するのも面倒なので、あたしはあえて何も言わなかった。

マキとアラタの会話を最後まで聞くことなく、あたしは自分の机に向かった。

一応、確認の為引き出しを開けてみる。

異常なし。

心の底からホッとした。

でも、その安心感は2秒ももたなかった。

机の上に置いてあるあたしのパソコンの端っこに付いている蛍光ペンクの付箋を見つけてしまったからだ。

付箋には、小さな字でインターネットにつながるであろうアドレスが書き込んである。

利き手とは違う手で書いたようなウネウネと気持ち悪い字だった。

強気に嫌な予感がした。

でも、たぶんアクセスしないとだめなんだろうなあ。

付箋に書いてあるアドレスを入力すると、画面上に《接続中》という文字があらわれた。

「どこにつないでんの？あゝエロサイトか」

いつの間にかあたしの隣にアラタがいた。

つまらない冗談にのっかってる場合ではない。

「違うとも言い切れないんだよね。こんなのがパソコンにくっついてさ」

あたしは、アドレスが書いてある蛍光ピンクの付箋をアラタの目の前にちらつかせた。

「またいやがらせか？」

アラタは呆れたような困ったような怒ったような表情で言った。

心配してくれているというのが、重々伝わってきた。

ありがとね。

「さあ」

「お前、誰かに何かしたんじゃないの？思い出してみ」

「心当たりありすぎて大変」

「だよな」

教師同士の会話とは思えない。

まあ、この男も昔はけっこういろんな事やらかしてたからね。

パソコンの画面上にはまだ《接続中》の文字。

さっさとつながれよ、うっとうしい。

「なあ」

アラタがいつもとは違う声で言った。

冗談を言うつつもりはなさそうだ。

「ん？」

「お前にいやがらせしてる奴ってさ、女だと思っただけど」

それはあたしも考えていた事だった。

あたしがいない間に引き出しに動物の死体をいれるなんて陰湿ないやがらせんされると、どうしても女の仕業だと思ってしまう。

今までの経験から学習したことだ。

「うん、あたしもそう思う。なんか、やり方が汚いよね……」

「どうせやるんだったらお前の愛車ぶっ壊すくらいの勢いでやって

もらったほうがいい」

「そんな事されたら、あたし何するかわかんない」

「想像したくねえ」

そんな会話をしていると、パソコンの画面上から《接続中》という文字は消え、画面全体が真っ黒になった。

その真ん中に《ここをクリック》という文字だけが表示された。

とても危険な感じがする。

《ここをクリック》と書いてある部分をクリックしてみた。

すると、ゆっくりと何かの画像が表れ始めた。

画像というか、動画のようだ。

全部で4種類の動画がパソコンの画面上にあわられた。

真っ赤なソファーと34インチの液晶テレビと大きめのガラステーブルが写っているコマ、黒のダブルベッドが写っているコマ、洗面所と脱衣所が写っているコマ、シルバーの冷蔵庫とシステムキッチンが写っているコマ。

それらはまず間違いなくあたしの部屋だった。

それに気付いた時、背筋が凍りついた。

ひよっとして…

この映像がリアルタイムで公開されているのではないだろうか…

という事は、夜中に腹出して寝てるところとか、朝必死で化粧をしているところとかも全部流れてたって事じゃねえか！！！！

自宅に侵入して何個もカメラを仕掛けたり、こんなホームページ作ったり随分手が込んでいる。

これは何が何でも犯人を探さないとイケない。

「これお前の部屋か？」

アラタが恐る恐る聞いた。

「そつだよ」

「これはさすがにヤバいんじゃないの？」

「わかってる！！！」

ついアラタに八つ当たりしてしまった。

それでもアラタは怒ったりしない。

「帰り道とかあぶねえよ」

正直、一人で帰るのは怖かった。

でもとにかく、家に帰ったらすぐにカメラを探し出して壊滅しなければいけない。

あたし一人で？

いやだ…

「送ってくよ」

アラタは何も言わなくてもあたしの気持ちをわかってくれる。

ふとコウスケの顔が頭に浮かんだ。

あの子も…

あたしの事わかってくれるんだよね…

「助かる。ついでにカメラ探しも手伝ってね」

「もちろん」

一時間目の授業はコウスケのクラス。

あんな事があつたばかりなので、授業するのが辛い。

一刻も早く家に帰ってカメラをなんとかしたいのに。

こんな日に限っていつもは開かないドアがすんなり開いたりするんだ。

腹立つ。

今ガタガタ言っても、どうせ今日1日授業しないといけないんだから、とりあえず授業の間は忘れない。

あたしは自分の両頬を張って気を引き締めた。

よしっ、がんばろう。

「みんな、おはよ。じゃあテキストにバンド練習始めて」

気を引き締めたはずなのに、やたらと気の抜けた指示だったと自分でも思う。

「先生、なんかやる気なくねえ？」

ヤマトが気にかけてくれた。

ん？

気にかけてくれたのか？

もう、それすらわからないくらいに力が入っていない自分がいる。

今日はまともな授業できないかもしれないな。

でもまあ、授業でバンドをやってる以上どっちにしてもあたしはあんまり何もなくていいんだよね。

「やる気があってもなくても、どっちにしてもあたし今する事ないんだよね」

「ヒマなの？」

「まあ」

「じゃあ、授業すればいいんじゃないの？」

ヤマトは珍しい生徒だと思った。

普通、授業なんていやなもんなんじゃないの？

「あんた授業やりたいの？クラシック鑑賞なんてやっても、どうせ聴いてないんでしょ？だったらバンドの方が全然楽しいじゃん」

まあ、要するにあたし自身が授業したくないだけの話。

「そりゃそうだ」

ヤマトはニツコリ笑って、自分のパート練習にはげみだした。

ヤマトはコウスケのグループでギター担当だった。

ベースがハルで、キーボードはユウリ、ボーカルはツバキでドラムがコウスケ。

そういえば、コウスケはドラムのテストの時には素晴らしい才能を発揮していたんだっけな。

「おい」

突然、コウスケがあたしの肩をつかんだ。

ものすごい剣幕であたしを見下ろしている。

「何？」

「ちょっと来い」

コウスケはあたしを音楽室から引っ張り出した。

この校舎には一階に職員室と宿直室があるだけで、音楽室がある階には空き教室とトイレしかない。

つまりまあ、今この廊下にはあたしとコウスケしかない。

「何なの？」

少し怒り気味に言うと、コウスケはさらに怒り気味の口調で返してきた。

「何かあっただろ？」

うーわ。

バレてるし。

あんた、ホントするどいねえ。

「別に何でもないけど」

とりあえず、ごまかしてみようと努力はしてみる。

「俺がそんなにごまかされるわけねえだろ」

無理だろうなとは思ってたけど、やっぱりね。

っていうか、あたし何で怒られてるわけ？！

意味わかんないんだけど。

「あたしは、あんたに何でも話さないといけないの？」

「何でも話してほしいんだよ」

コウスケはじつとあたしの顔を見ている。

絶対に目をそらさない気だ。

あんたの目、ずるいよ。

全部話してしまいたくなるんだもんな。

「…実はさ、最近ちょっとしたイジメっていうか…いやがらせされてるんだよね」

「は？なんで？」

「そんなん知らない。わかってたら手打ってるしな」

「いやがらせってどんな？」

「職員室のあたしの机の引き出しに動物の死体入れられてたり、あたしの部屋に隠しカメラ仕掛けてその映像ネットで流されてたり…」

コウスケはやっとあたしから目をはなしてくれた。

窓と方を睨みつけ、下唇をぐつと噛んでいる。

怒りが伝わってきた。

あたしが何者かによっていやがらせを受けているという事に怒りを感じているコウスケを見ていたら、なんだか嬉しくなった。

あたしの為に怒ってくれているんだ…

今度はあたしがコウスケの顔をじっと見つめた。

コウスケはキレイだ。

間違いなくあたしよりも。

グリーンがかった瞳の色がキレイ。

スツと整った鼻がキレイ。

キリツとした眉がキレイ。

少し大きめの口がキレイ。

とがったのとぼけがキレイ。

金色の髪がキレイ。

長い指がキレイ。

スラッとのびた足がキレイ。

低いけれど、優しい声がキレイ。

正直、見とれる。

なんだかコウスケが遠く感じた。

あまりにも美しいから…

「いつから？」

コウスケに見とれていたあたしは、コウスケの声に驚いた。

「へ？」

「いつからそんな事されはじめたの？」

「あたしが保健室で寝てた日…たぶんあの時からだったと思う」

「俺が兄貴の事話した日？」

あたしはうなずいた。

同時にコウスケはとても悲しそうな顔になり、そつとあたしを抱きしめた。

「どうしたの？」

コウスケの胸に口を押し付けられているせいでこもってしまった声で言った。

「俺、何も知らなかったから…カヅキがそんな目に合ってるなんて

知らなかったから…自分の事ばかり話してごめん」

コウスケがあたしを『カヅキ』と呼んだ。

今まで誰に呼ばれてもたいして何も感じなかったが、コウスケにそう呼ばれた瞬間、自分でもビックリするくらいドキリとした。

もっと呼んでほしいと思った…

「なんであんたがあやまんの？」

「気づいてあげられなかったから…カヅキを守ってあげられなかったから…」

コウスケの声で名前を呼ばれる度に、呼吸困難に陥りそうになる…

どうしよう…

ちょっとヤバいかも…

そんな事言われたら、あんたの事好きになるよ…

「そんな事…あやまらなくていいよ。全然コウスケのせいじゃないんだし…」

コウスケはあたしをさらに強く抱き締めた。

ここは学校で、ドアを隔てた向こう側には他の生徒がたくさんいる。

けど…

そんな事は考えたくない。

どうでもいい。

もっとこうしていたい。

出来ればずっとこうしていたい…

でもやっぱりそれは無理な話だった。

コウスケはあたしを離し、薄く笑った。

「もう教室入らないと、バレるね」

『バレる』という表現がなんとなく嬉しかった。

「そうだね。ドラムの練習しないと」

そう言いながら、あたしは音楽室のドアを開けようとした。

すると、コウスケはあたしの腕をつかんだ。

「ちょっと待って。兄貴の事、もう一度話したい」

あたしはドアから手を話し、コウスケの方へと向き直った。

「うん。具体的に話し合わないとね。じゃあ、今夜合おうか」

コウスケは驚いた顔をしている。

「どづしたの？」

「いや、なんでもないよ」

「連絡するから」

本日のすべての授業が終わり、あたしはアラタと一緒に職員室で仕事終わりのコーヒーを飲んでいた。

あゝ、うめえなあゝ。

「じゃあ、帰るか」

朝あんな事があり、1人で帰るのは危ないとの事でアラタに送ってもらった約束をしていた。

いい友達もってあたしは幸せだな。

「宜しく願います」

「任せる。飯でも食って帰るか？」

「いや、今日はやめとく。別の約束あるから」

もちろんコウスケとの約束の事だ。

アラタには一応伏せておこう。

いろいろ言われたら面倒だし。

教職員用の駐車場には、アラタの愛車のオデッセイが停まっていた。

アラタが助手席側のドアを開けてくれた。

ジェントルマン。

「どうぞ」

「ありがとう」

ちよつとしたお姫様ごっこをした後に、アラタわドアを閉め、自分も運転席に乗り込んだ。

オデッセイで姫にはなれねえな。

しばらく走っていると、アラタが話し出した。

「あのいやがらせ、マジで誰がやってんだろうな」

「わかんないから気持ち悪いんだよね。理由もわかんねえし」

「お前、ホントに心当たりねえの？」

「ねえよ。教師になってからはね」

「じゃあ昔の知り合いがやってるとか」

「それはねえだろ」

アラタは「んー」とうなり、考え込んでしまった。

2人とも無言で考え込んでいるうちに、あたしの自宅に到着した。

ここではアラタは助手席のドアを開けてくれなかった。

やるんだったら最後までやれよ。

「送ってくれてありがとね」

「どういたしまして。明日も迎えに来ようか?」

あたしはアラタに笑顔を向けた。

「ううん、もう大丈夫だから」

「そっか」

「うん、ありがとう。じゃあ」

「ドアの前まで送っていくよ」

「何？入ろうとかしてんの？絶対やけど」

「余計な心配してんじゃねえよ。お前なんかに発情しねえから」

あゝそうかい。

鉄の階段をのぼり、自分の部屋のドアの前に立った時、背筋に冷たいものが走った。

鍵穴がズタズタに傷つけられていた。

「何…コレ…」

驚きと恐怖を一気に感じた為か、声がかすれてしまった。

「まあたぶん、同一犯だろうな」

アラタは冷静に言った。今のあたしにはこの冷静さが、頼もしかった。

「最悪…」

そう言ったのほとんど同時に誰かの視線を感じた。

もちろん、アラタの視線ではない。

視線の主を探そうとキョロキョロしていると、階段の下で黒い影が走り去っていくのがわかった。

「なんだよ、あいつ。追うか？」

アラタも黒い影が動くのを目撃していたらしい。

「暗くてよく見えなかったね。危ないから追わなくていい」

あたしはアラタにウソをついた。

本当は…

一瞬だけ見えた黒い影の正体が誰だけわかっていた。

間違いなく矢崎ユウリ。

嫌われてるとは思っていたけど、まさかこんなこと…

今までの事、全部あんたの仕業なの…？

「とにかく、中に入って盗られた物がないかどうか調べてみる。俺、ここで待ってるから」

「いいよ。上がって。カメラも探してもらおう約束だったし」

あたし達は家中をくまなく搜した。

盗られた物がないか、カメラは何台あるのか。

結局、盗られた物は何一つなかった。

その代わり、小さなカメラが全部で6台みつかった。

画像が4つなのにカメラが6台だったのは、たぶんあの画像が時間帯によって変わるようなシステムになっているからだろう。

鍵穴がズタズタになっていたのは、泥棒するのが目的だったのではない。

あたしを恐がらせるのが目的だったんだ。

だとすると、やっぱりあの鍵穴もいつものいやがらせの犯人と同一人物と考えて間違いなさそうだ。

じゃあ、やっぱりユウリが？

いや、ユウリはたまたま今日あの場所にいただけかもしれない…

とにかく、何の確証もないんだからユウリが犯人だと決めつけるにはまだ早い。

だけど…

あんな場所にたまたまいるなんて事はあるのだろうか…？

「盗られた物、なかったよ」

「そうか。よかった」

アラタはホッとしたようにため息をついた。

ホントに心配してくれてんだね。

ありがとう。

「うん。あ、ちょっと待ってて」

あたしはアラタをリビングに置いて、キッチンに向かった。

お湯が沸くのを待っていると、やっぱりさっきの事を考えてしまう。

ここはユウリの家から近いのかな？

それとも、このマンションに友達が住んでるとか？

でも、あたしに見られた時、逃げたようにしか見えなかった。

逃げるのは何かやましい事があるからだよね…

やかんのピューというけたたましい音で、今お茶を淹れていたところだという事を思い出した。

食器棚からマグカップを2つ取り出し、紅茶を淹れた。

リビングに戻り、紅茶を差し出すと、アラタはニッコリ笑った。

「何？」

あたしがそう聞くと、アラタはさらに笑った。

真っ白い歯が輝いている。

「だから、何？」

「お前、丸くなったね」

「は？」

「昔のお前ならさ、さっき走っていったやつ絶対追っかけてると思うんだよなあ。」

ガンギレで。

なのに、危ないからって追わせなかっただろ？

だから、変わったなあって。

女っぽくなったな」

面と向かってそんな事言われたら困るんだけど。

照れるよ。

「そう?」

昔のあたしを知っているのは、今はこの男しかない。

いつもなら忘れたい過去だけど、この男と過去の話をするとなんか
った思い出ばかり出て来る。

なんですか…

「そうだよ」

そう言うと、アラタは紅茶を一気に飲み干した。

猫舌ではないようだ。

マグカップをテーブルに置くと、「よいしょ」といいながら立ち上がった。

あんたはおっさんか。

「この後約束あるんだろ？俺、帰るわ」

「あゝ、うん。ごめんね」

「いいよ」

アラタを階段の下まで見送り、オデッセイが見えなくなると、あたしはまたさつきユウリらしき人物を目撃した場所を見た。

あれは…

本当にユウリだっただろうか…

あの鍵穴をユウリがやったなんて信じたくない。

いくら普段罵られっぱなしだといってもユウリの事は嫌いじゃないし、大事な生徒の一人なんだから。

それに、もしあれがユウリだったとしても確かめようがないじゃないか。

しらばっくれられたら終わりだし、もし違ったとしたら自分に疑いがかかる辛さはよく知っている……

さて、どうしたものか。

部屋に戻り、ため息をついた。

いろんなモノを振り払うように髪をくしゃくしゃにしてみたが、なんの効果も得られなかった。

あたしは、カバンから携帯電話を取り出し、コウスケの自宅の番号を入力した。

携帯電話の番号、聞いとけばよかった。

コール音が3回鳴った後、男の人の声が聞こえた。

「もしもし」

「藤嶺と申しますが、コウスケさんはご在宅でしょうか？」

「俺」

電話に出たのはコウスケ本人だった。

機械を通すと、肉声とは違う声なのでわからなかった。

電話の声に、またドキリとした。

「今から迎えに行くから」

「えっと、じゃあ駅まで出るから」

「わかった」

学校以外の所で会うなんて、ちょっと緊張するな。

なんて思ったすぐ後に、さつきくしゃくしゃにした髪の毛を思い出
し、慌てて洗面台に向かった。

髪を整え、軽く化粧も直すと、さっそく駐車場に向かった。

エンジンをかけると、陽気な音楽が鳴りだした。

その音楽を聴いていると、返って重い気持ちになりそうだったので止めた。

今からコウスケに会えるのは嬉しいけど、話が重くて暗い内容だから、気を引き締める為にその後違う音楽もかけなかった。

駅につくと、改札口の近くにコウスケの姿を見つけた。

小さくクラクションを鳴らすと、コウスケはそれに気付き、小走りでやってきた。

「おまたせ」

「待ってないよ」

あたしは自分の部屋に向かって車を発進させた。

「どこいくの？」

「あたしの部屋」

「えっ?!」

教師が自分の部屋に生徒つれこんじゃあ、マズいよな。

でも、今回は仕方ない。

「誰にも聞かれたくない話でしょ？」

コウスケは慌てた様子を落ち着け、ゆっくりとうなずいた。

「どうぞ、入って」

自分の部屋のドアを開けながら言うと、コウスケは「ありがとう」と言って、遠慮がちに部屋にあがった。

「テキトーに座ってて。コーヒーでも淹れてくるから」

アラタの時と同じように、コウスケをリビングに置いてあたしは台所に向かった。

どういうわけか、コウスケはさっきアラタが座っていた所と全く同じ所に座っている。

なんとなく申し訳ない気持ちになる。

1日のうちの、しかも短時間で部屋に2人の男を連れ込んでるけど、いいのかな？

事情を知らない人が聞いたら、完全に魔性の女だと思われるだろうな。

まあ、別にいいか。

ガシャガシャと音を立てながらコーヒーを淹れていると、コウスケがリビングから声を掛けてきた。

「もしかして、俺がここにくる前に他に男がいたんじゃない？」

ギクリとした。

動揺するような事は一切していないはずなのに、ものすごく後ろめたい気持ちになった。

アラタと付き合っているわけでもないし、コウスケと付き合っているわけでもないのに、恋人に浮気がバレた時のような感覚にとらわれた。

「誰もいないよ。なんで？」

とっさにウソをついてしまった。

「いや、別になんとなく」

たぶん、コウスケは今あたしがウソをついた事をわかっている。

あたしはウソをつくのがヘタなのかもしれない。

「そう……」

気まずい空気になりそうな感じだったので、淹れたてのコーヒーを

コウスケに差し出した。

コウスケは小さく笑って礼を言った。

ウソを追求しないコウスケの優しさに、罪悪感を感じた。

あたしたち2人はなかなか本題に入れなくて、しばらくくだらないテレビを観ながらはしゃいでいた。

コウスケがこの部屋にきてしばらく時間が経った時、コウスケが重い口を開いた。

「俺さ、これからどうすればいいのかな…」

その低い声に少し緊張し、くずしていた足を正座に替えた。

核心的な言葉は口にしなかったが、何のことを言っているかは必然

的にわかる。

「今、どんな状態なの？」

コウスケはうつむく。

あたしは何も言わないでコウスケの返事をじっと待った。

「目が…ヤバイ」

この反応からして、たぶんそうとう浸ってしまっているんだと思う。

ひよっとしたら、もう手遅れなのかもしれない。

だけど、初めから諦めるわけにはいかない。

コウスケの兄貴を助ける為ではなく、コウスケ自身の為に。

「そつか…。お兄さんがどこに薬しまってるか知ってる?。」

「今は一緒に住んでないから…。あ、でも兄貴が今住んでる場所なら知ってる」

あたしは小さなメモ用紙とボールペンを差し出し、コウスケの兄貴が今住んでいる場所の住所を書かせた。

見慣れない住所。

「ここにホスト仲間と2人で住んでるらしいんだ」

「その人の名前はわかる?。」

「源氏名かもしれないけど、確かレツって名前だったと思う」

なるほど。

同じホストクラブの人間と同居か…

まず間違いなくレツもジャンキーだ。

そんなやつと一緒に住んでるうちは薬なんてやめられるわけではない。

まずレツをどうにかしないとだめだな。

「とにかく、そのレツってやつとあんたの兄さんを離さないと話が進められない。兄さんをあんたのうちに連れ帰る事は出来そう?」

コウスケはしばらく考える。

でも、答えはわかっている。

「無理だと思う」

そりゃそうだ。

レツと一緒に最高の生活を送っているのに、わざわざ元の家に戻るなんて事はしないだろう。

でもあたしには考えがある。

とても危険な考えが。

「どうしても兄さん助けたいんだよね？」

コウスケは強い表情でコクリとうなずく。

「じゃあ、いざって時には兄さん殺せる？」

あたしのその残酷な発言を聞いたコウスケは、今までうつむきかげんだった顔を上げ、真っ直ぐにあたしの目を見た。

「
ああ
」

『その覚悟は初めからあった』

と続きそうな返事だった。

このあまりにもはっきりとした返事に、あたしの方が恐怖を感じるほどだった。

でも、これだけの覚悟があるのなら、あたしが考えている事も出来そうだと。

「あたし、あんたの兄さんを助ける方法知ってるんだ。だけど、本当に危険でヘタすりゃあんたか兄さんが死ぬかもしれない」

「うん」

「一応聞いておくけど、あんたの家に兄さんを病院に入れるお金はある？」

コウスケは首を横に振った。

親戚の援助で生活しているコウスケに、そんな金があるわけもなかった。

「だったらやっぱり、あたしの考えを実行しよう。」

でもね、あんたたち2人には地獄みたいなもんだよ。

それでも耐えられる？

何があっても途中で投げ出したりしない？」

コウスケの目を見れば、答えはわかった。

あたしが、これからコウスケの兄責にしようとしている事の説明をし終えると、コウスケは深いため息をついた。

「それぐらいしないとダメなんだよ。

もしかしたらそれでもダメかもしれない。

でも、今言った方法で助かった奴を1人だけ知ってるんだ。

だから、それに賭けてみようと思う」

「ホント？誰？あ、俺の知らない人なのかな」

コウスケは目を輝かせている。

希望が見えてきた事が嬉しいのだろう。

「あんたも知ってるよ」

言ってもいいものなのか迷ったが、結局言う事にした。

具体的な名前をあげた方が、コウスケに希望の光をより近いところで見せてあげられるような気がしたからから。

「徳沢アラタ」

「えっ?!」

コウスケは、アラタがあたしの昔の仲間だった事を知らなかったみたいだ。

アラタも高校の時は、手がつけられないほど荒れていた。

当たり前のように薬に手を出し、当たり前のようにハマった。

アイツも、本当にヤバい所までいったけれど、地獄を乗り越え、今は教師をやっている。

こんな奇跡も存在する世の中なのだ。

でもそれは、アラタの驚異的な精神力とこの地獄から抜け出したいという強い想いがあるからこそのだ。

コウスケの兄貴におなじ方法が通用するかどうかはやってみなければわからない。

ただ…

ヘタをすれば死に至るこの方法。

最良手段と言えるだろうか…

インターホンの甲高い音が響くマンションの一室のドアの前に、緊張した面持ちで狭間コウスケは立っていた。

「だれ？」

張りや生气を感じさせない声が返ってくる。

「オレだよ。コウスケ」

コウスケがそう言ったとほぼ同時くらいの早さで勢いよくドアが開いた。

「コウスケ！久しぶりだなあ。お前、元気か？」

コウスケの兄はいつもと変わらない笑顔で弟を迎え入れた。

薬が入っている状態の時は、まだ正常と呼べる範疇。

目がヤバくなるのは、薬が切れかかっている時だ。

「俺は元気だよ」

「そりゃよかった」

「ちょっと、兄貴に話したい事あって来たんだけどさ…」

「じゃあ、上がれよ。連れもいるけど」

「外で話したいんだ」

コウスケの兄貴は、怪訝そうな表情を見せつつも、快くコウスケに従った。

「レッツー、ちょっと出てくるわ」

同居人に外出を告げると、さっさと靴を履き、コウスケと共に玄関を出た。

エレベーターに乗り込み、しばらくすると1階に到着した。

マンションを出てから一般道に出るまでの間にはこのマンション備え付けの駐車場がある。

コウスケ兄の車もそこに停まっている。

その駐車場の中で、コウスケは兄にちょっとした注意をした。

「兄貴、靴ひもほどけてる」

もちろん、コウスケの兄は弟の言葉を疑う事なく自分の靴ひもを確認する。

だが、靴ひもにはなんの異常も見当たらない。

兄は弟に文句を言おうと、再び顔を上げた。

その瞬間、兄は弟に力いっぱい殴られた。

何が怒ったのかわからないまま、兄はすぐそばに停めてある車に乗せられた。

朦朧とする意識の中、一つだけ確認する事が出来た。

運転席にいるのは女だ。

その思考を最後に、兄の思考回路は休止した。

目を覚ました兄の意識レベルは、まだ完全には回復していない。

「久しぶりだね」

女の声。

兄はまだ少しぼやけている目を懸命にこすり、どうにか声の主である女の姿を見ようとした。

じっとみつめているうちに、だんだんとハッキリ見えてきた。

完全に女の姿が兄の目に映った時、兄はハッとした。

「お前……」

コウスケ兄のあたしを見て驚いている表情が、忌々しく、なんとも言えない感情が沸き上がってきた。

怒り？

憎しみ？

恨み？

いや…

そんなものじゃない。

もつと深くて、黒くて、人間の中に存在するあらゆる感情の中で最も底にある感情。

それをなんと表現すればいいのかわからない。

「やっぱり…知り合いなの？」

コウスケは、あたしと兄の顔を交互に見て言った。

コウスケにそう聞かれた時には、あたしの顔はもうすでに昔のようになっっていたに違いない。

「知り合いどころじゃねえよ。あたしとアラタはコイツに殺されそうになったんだから…」

『殺されそうになった』そんなセリフを聞いても、コウスケは全く動じなかった。

表情だって微塵も変わらない。

もしかしたら…

コウスケの精神力はアラタを超えるかもしれない。

ただ、兄を助けるためには兄の精神力が一番重要なのだ。

コイツにそれほど強い意志があるとは思えなかったが、コウスケの

為なのだからやるしかない。

自分を落とそうとした男を助けるほど、あたしは出来た人間ではない。

だけど、やっぱりコウスケの為なら仕方がないと思える。

「何言ってるんだよ。アラタを殺そうとしたのはお前の方だろ？」

「あたしはアイツを助けたんだよ。だから今一緒に教師やってんだから」

コウスケの兄貴は、一瞬間を置いてからケラケラと笑い始めた。

「お前らが教師?!世の中終わりだな」

あたしも口角を片方だけ上げて笑った。

「お前が生きてる時点で世の中終わってんだよ」

コウスケはあたしたちの会話に口を挟んでこなかった。

挟めなかったのかもしれないが。

コウスケの兄貴は、ある事に気がつき、周りをキョロキョロと見回し始めた。

それまで余裕綽々だった表情は一変し、青ざめ、引きつっている。

やっと思い出したか。

「やっと思い出した？そうだよ。ここは、あたしがアラタを治した場所だよ」

あたしが笑ったままそう言うと、兄の顔から一気に血の気が引いていった。

「お前…俺をアラタと同じ目に合わす気なのか？」

兄は怯え始めた。

アラタと同じようにされるのがよほど嫌みたいだ。

「そつだよ。俺、兄貴の事好きだから、なんとかして助けてやりたいと思うんだ。だからさ…許してくれよ」

あたしが答える前に、コウスケが答えた。

慈悲の目で自分を見つめる弟を、兄はものすごい剣幕で睨みつけた。

「俺はアラタみたいに薬から手を引きたいなんて思ってたねえんだ！
！むしろ共存しようとしてるんだぞ！！邪魔すんじゃない！！！」

薬が切れかかっているのか、兄は半狂乱になりながら言った。

「目え覚ませ。薬と共存なんてありえない」

コウスケは、自分の兄を冷たい目で見下ろしながら低い声で言った。

心を鬼にすると決め込んだようだ。

あたしが編み出した地獄の治療法――

ジャンキーを監禁し、一切薬を与えない。

禁断症状を引き起こした場合は、ジャンキーを殴り倒し、気絶させる。

ただその繰り返し。

食事や排泄などは、監視役が面倒を見なければならない。

アラタの時の監視役はもちろんあたし。

そして今回はコウスケ。

コウスケにはしばらくの間休学してもらうように手続きも済ませている。

準備は整った。

こんな事をまたやるなんて、夢にも思っでなかった…

この方法には、もう一つしなければいけない事がある。

殴ってばかりいては、ジャンキーが本当に死んでしまう。

だから…

大きな愛がないといけない。

この人を助けたいという強い想いと、助かりたいという強い想いがあつてやっと成功する。

時には一緒に泣き、抱き締めてやらなければならない。

だから、今回の監視役をコウスケにやらせてもらうことにしたんだ。

あたしには、コイツに対して強い思いなんてないから。

なんであんなが…

「カヅキー！！俺はぜってえこっから抜け出してやるからなあー！！！」

兄は気がふれたように叫びだした。

なんであんなが…

「うおわあああ！！！！」

兄の叫び声が、響き渡る。

どれだけ叫んでも誰の耳にも届かないのに。

「なんであんたがコウスケの兄貴なんだよ……」

コウスケ兄――

源氏名、トウキ。

本名、狭間テツ。

予感

『ギルティ』のトイレ内は静まり返っていた。

少女がこの場にいるという事はテツには絶対にバレてはいけなかったのに、少女の油断でバレってしまった。

いろんな事がもう遅い。

少女はテツに、ここにいる理由を問われたが、一向に答えることが出来なかった。

「どうしてここにいるんだって聞いてるんだよ」

テツは少女に詰め寄る。

「そんな事お前に言う必要があんのか？」

南條がすごんだ。

テツよりも背が高い南條は、テツを見下ろしながらプレッシャーをかけている。

それでもテツは引き下がらなかった。

「どう見てもお前らグルだよな。どついう関係なわけ？」

南條に怯えていたテツの姿はもうなく、探るような目つきで少女と南條を見ている。

少女はそんなテツの目を見ることが出来なかった。

自分のしていることは、明らかにテツに対しての裏切り行為なのだから。

「お前にそれを教えるわけねえだろうが」

またしても、少女の代わりに南條が答えた。

少女を庇う為に南條がテツの質問に答えているのだが、南條自身も動揺している。

「てめえに聞いてんじゃねえよ。コイツに聞いてんだよ。なあ、カツキ」

『カツキ』と呼ばれた少女は、一度勢いよく息を吐くと、真っ直ぐにテツの目をみた。

「あたしはあんたを売ったんだよ」

少女の思いがけない言葉に、テツも南條もしばらく声を発する事が

出来なかった。

「売った…？」

テツは少女の顔と南條の顔を交互にゆっくりと見比べた。

そこではっとする。

ようやく状況が早く出来たらしい。

「じゃあ、コイツ警察かよ！！」

ただし、間違った状況把握。

少女はテツにそういう連想をさせるためにあえて売ったという表現をしたのだ。

南條が教師だとバレると、ナメられるおそれがあったから。

ここでナメられたら全て終わりだ。

だからこのまま、南條を警察だと思わせておく必要があった。

南條は瞬時に少女の企てに気づき、一切余計な事を言わなかった。

今この状況でバカなのはテツだけだった。

少女と南條が黙っている事によって余計に真実味が増し、テツは南條を警察の人間だと完全に思い込んだ。

「だめだ！今パクられるわけにはいかねえんだ！見逃してくれよ！頼む！！」

先ほどの勝ち誇ったような口調とはまるで違っている。

テツは、ただの高校教師に半泣きで懇願した。

人間の思い込みとは素晴らしいものだ。

一度間違った解釈をしてしまうとそのまま突っ走る傾向があるらしい。

便利な様で迷惑な様で、人間とは困った生き物だ。

ただ、この場合は人間の傾向とテツの頭の悪さがどれほど役にたたかかは計り知れない。

「どうして今パクられるわけにはいかないんだ？」

頭を抱え込んでいるテツに、南條がたずねた。

「殺られる…」

テツは異常なくらいに何かに怯えている。

恐怖のせいか、呂律がうまくまわっていない。

もちろん、テツは南條に怯えているわけではない。

ある人物に対し、限らない恐怖感を抱いているのだ。

「誰に？」

「…」

テツは南條の問いに答えられないでいた。

まるで、名前を言つとその人物がここに現れると思つていようだった。

「岩佐木か？」

テツはブルブルと震えながら言つた。

このテツをこれだけ怯えさせるなんて、岩佐木という男はよほど恐ろしいのだろう。

「お前がもし檻に入ったら殺せねえだろ？」

南條がもつともな質問をした。

すると、テツは首を横にブンブン振った。

「岩佐木は…」

あそこの連中は普通の人間とは違う…

一度殺ると決めた以上、そいつが外国にしようが檻にしようがどんな手段使っても必ず仕留める…

逃げ切るなんて事は不可能なんだよ…」

テツはその場に崩れ落ちた。

震えも止まらないようだ。

南條はテツの話を聞いて、何かを考えている。

数秒間沈黙が続くと、それまでほとんど動かなかった南條が口を開いた。

「そついつ事なら今回は見逃してやる。ただし、俺が出す条件をのんでもらうぞ」

テツは南條の発言に呆氣にとられた。

当然だ。

目の前にブッシャーがいるのに、それを見逃すポリ公なんているわけがない。

「本当か…？なんでも言つこと聞くよ！-」

呆然としたのは一瞬の事で、テツの目はすぐに輝きだした。

大きな希望が目の前にちらついているのだから仕方のないことだ。

「岩佐木、今どこにいる？」

少女から岩佐木組の本拠地の場所を聞いたにも関わらず、南條は同じ事をテツにも聞いた。

南條の目は真っ直ぐにテツに向いている。

テツは少し迷っている様子を見せたが、やがて唇を震わせながらゆっくりとその場所を答えた。

「はあ？なんで？」

南條は眉間にシワをよせ、テツに疑いの目を向けた。

テツの言った場所が少女が言った場所とは違っていたからだ。

「てめえ、ウソついたら俺が殺すからな」

南條は険しい顔でテツの頭を鷲掴みにした。

テツは泣きそうになりながら、首が取れてしまうんじゃないかと思うほど横に振った。

「ウソじゃねえよ。前の事務所はサツに目つけられてもうダメだから、岩佐木組系の兄貴の事務所に移ったんだ」

「はっ。岩佐木組の頭が聞いてあきれるな。情けない」

テツも南條と同じ事を思っているのか、何も言わなかった。

「今から俺をそこに連れていけ。それがお前を解放する条件だ」

南條は低い声でそう言った。

テツは迷いながらも小さくうなずいた。

南條とテツは、店の外の駐車場に停めてあった黒のセダンに乗り込んだ。

テツが組から借りているものらしい。

「お前は家に帰れ」

南條は少女にそう言って、少女が自分たちと共に車に乗ることを許さなかった。

「なんで？あたしも一緒に行くよ」

少女はそう言って、後部座席のドアに手を伸ばした。

「だめだ」

南條は険しい表情で少女に言った。

口答えを許さない顔だった。

「わかった…でも、戻ってきたらちゃんと連絡してよね」

少女は心配そうにいった。

「必ず連絡するから」

南條はそう言ってニッコリ笑った。

この笑顔を見た少女は無性に寂しくなった。

この男がもう二度と自分の元には帰ってこないような気がしてならなかったから。

大丈夫…

あいつはあたしを置いてどこかに行ったりしない…

必ず無事に帰ってくる…

少女はそう信じて帰路についた。

疑惑

「ねえ、カヅキちゃん。コウスケ、今日休みなの？」

連城ツバキが心配そうにたずねてきた。

「その事なんだけど、気になるだろうし言っておく。コウスケさ、ちよつと事情があつてしばらく学校休む事になったんだ。もう休学届も出してある」

クラス中がざわつき始めた。

突然の事に、みんな動揺しているようだ。

「事情つて？」

ツバキが追求してきた。

やっぱり理由を知りたがるもんだよね。

どうしよう…。

「家庭の事情だからあんたたちに話す事は出来ないんだ。ごめんね」

もちろん、本当の理由を話すことなど出来ない。

かと言って、テキトーにウソをつく事もあたしには出来なかった。

あたしの表情でなにかを察したのか、生徒たちはそれ以上何も聞くとはしなかった。

この子達はこんなにいい子たちなのに、他の教師がそれに気がつかない事が不思議でならなかった。

「今日は何すればいい？」

ツバキが笑顔で言った。

ツバキのこの発言で、少し暗くなってしまった空気が元を取り戻したようだ。

教室のあちこちから生徒達の話し声が聞こえてくるようになった。

「じゃあ、この前作ったグループごとに集まって演奏する曲決めて」

あたしも笑顔で答える事が出来た。

仕事中にコウスケの事を考えてはいけなかった。

気になって仕方がないけれど、あたしがここでいくら心配したからといって何が変わるわけでもない。

ならせめて、仕事を全うした方がコウスケも少しは気が楽になるだろう。

あたしがボーっとしている間に、すでに生徒達は各グループに分かれ、意見を出し合い、何を演奏するかを相談していた。

コウスケのいないあのグループはどうするのだろう。

その事が気になり、彼女たちの所に行ってみた。

「あんたたち、コウスケいなくてドラムどうすんの？別になくてもいいんだけど、なかったらしょぼくなるよ」

猫っ毛で背の低い桐生ヤマトにたずねてみた。

するとヤマトは、すっかり整えられた眉毛を垂らし、少し微笑んで言った。

「コウスケほどドラム出来る奴はこの学校にはしないしね。ツバキが歌いながらドラムもやるって」

以前ドラムのテストをした時にツバキのドラムさばきを見たけれど、決して上手いとは言えない出来だったように記憶している。

しかし、他のやつらも似たり寄ったりだ。

授業の一環とは言え、やるからにはキッチリこなしたいはずだし、ツバキも少し不安があるようだった。

そこで、あたしはふと単純な事に気がついた。

「あたしがドラムやるのか？」

ヤマト、ツバキ、ハル、ユウリの4人が一斉にこちらに顔を向けた。

1人を除いた3人の目が輝いている。

「なんであんたがあたしたちのバンドに入るんだよ。これって採点とかあるんじゃないの？あんたが入ったら誰が採点するんだよ。バカじゃねえの」

ユウリが棘のある言い方で言った。

ユウリにキツイ事を言われるのはいつも通りなはずなのに……

徳沢アラタが自宅にやってきたあの夜ユウリの姿を見かけてから、あたしはユウリの目をみる事が出来なくなってしまった。

やはり、ユウリを疑ってしまっているのだろうか……

違う。

そうじゃない。

ユウリは何もやっていない。

自分に言い聞かせる度にユウリを疑う気持ちが強くなっているような気がしてならない。

だって、あんな所に偶然居合わせるなんてやっぱりおかしい。

いや。

本当にただあそこにいただけなんだ。

だったらどうして逃げ出した？

それはアラタが鋭い目で彼女の姿を追ったから。

でも、実際に追いかけたわけでもないし、あたしたちはユウリの知り合いなんだから逃げる必要なんてないはずではないか。

けど…

この数日、こんな1人問答を繰り返している。

考えれば考えるほど悩んでしまう。

どんなに忘れようとしても疑ってしまう。

あたしも教師の前にただの大人だって事なのかな。

この子たちを心から信じてやれない他の教師たちと変わらない…

とにかく、どうにかして事実を確かめなければならない。

「何言ってるの。自分が入った方があんたたちの事ちゃんと見れるし、むしろ採点しやすいじゃんよ」

あたしがそう言つと、ユウリ以外の3人は大きく笑った。

「カヅキちゃんが入ってくれたら他のどのグループよりも上手に出来るね」

ツバキが言った。

「コウスケの代わりは先生しか出来ねえよな」

ヤマトが言った。

「じゃ、決まり」

ハルが言った。

どうやらユウリの意見は完全に無視されたらしい。

あたしにはあらく強気なユウリも仲間達には逆らえない様子だ。

ユウリはそれ以上は何も言わずに、膨れっ面でぷいと窓の方を向いてしまった。

「で、あんたたち何の曲やるかもう決めたの？」

早くもギターをいじり出しているヤマトに聞いた。

元々弾けるらしく、扱い慣れている様子だ。

「まだ。なんかいい曲ない？」

ヤマトとはテキトーなコードを弾きながらあたしを見ずに答えた。

すると、ツバキが少し恥ずかしそうに口を開いた。

「あたし、やりたい曲あるんだけど…」

モジモジしているツバキをユウリが興味深そうに見た。

「どんなのやりたいの？」

ユウリの口調は、あたしに対するものとは全く違っていた。

別人がしゃべったのかと思うほど、声のトーンも違っている。

この子も本当は悪い子ではない。

ただあたしの事が嫌いなだけ。

あたしは、この矢崎ユウリという生徒の事をもっと知りたくなった。

どんな家庭環境で育ったのか、幼い頃はどんな子供だったのか、どんな友達がいるのか、この子は一体何を考えてるのか。

それを知れば今のユウリの事を理解してあげられるし、もしあたしに対するいやがらせが全てこの子のせいだとしても、笑って許して

あげる事が出来るかもしれない。

「えつとお……」

小さな声で曲名を言ったツバキの声は桃色に染まっていた。

その曲は、テレビなどでもよく聴く流行りのラブバラードだった。

そんなツバキの様子はとてもかわいらしく、しおらしい。

思い入れのある曲なのかもしれない。

「それ、いいじゃん」

ユウリは喜んだ。

協調性のない子だと思っていたが、それもあたしに対してだけなのだろう。

「うん。俺もそれでいい」

ヤマトもハルも申し分はなさそうだったので、どうやらこの曲に決定的ようだ。

授業が全て終わると、あたしはある場所に向かった。

到着したのは、廃屋と化した倉庫。

周りには草が生い茂り、どこから来るのか少し生臭さを感じる。

湿っぽく、閑散としていた。

昔から変わらない…

巨大な鉄の扉には真新しい南京錠が、錠が外れた状態でぶらさがっている。

扉を横に引いた。

重そうな金属音のわりには意外に容易に開ける事が出来た。

開いた扉の先は、物のシルエットはわかるが、それがなんなのかはわからないくらいの暗さだった。

「まだ生きてる?」

あたしは奥にいろであろつ男に声を掛けながら歩を進めた。

2人の男がいるはずなのに、どちらからも返事をもらえなかった。

何やらよくわからない錆びた機械の間をすり抜けて奥に進むと、出入り口から一番遠い角に2人の男の気配を感じた。

2人ともあたしに気づいている様子はない。

どうやら眠っているようだ。

もしかして、テツは気絶しているのかもしれない。

自分の鞆をまさぐり、携帯電話で2人の顔を照らしてみた。

テツもコウスケもずっぴりと汗をかいている。

あたしがくる少し前に格闘があつたのかもしれない。

「カ…ツキ…？」

先に目を覚ましたのはテツの方だった。

マズいな。

「お前、俺をこんな目に合わせやがって…」

テツの目は血走っていた。

口の周りには泡もたまっている。

人間というよりも獣に近い姿だ。

恐怖よりも同情を感じる。

1人の人間をここまで落としてしまうあの魔法の粉が忌々しくて仕方がない。

「あんた、もう人間じゃないよ。いくらコウスケが頑張ったってもう無駄なのかもね。あんたの心は弱い」

あたしは…

もう、この男をかわいそうとしか思えなかった。

弟にどれだけ想われていても、それに気づけないのだから…

こんなヤツ、助からなければいい――

死ねばいいんだ――

あたしの中に、突如憎悪の感情が芽生えた。

「そんな事ないよ」

いつ目を覚ましたのか、コウスケが落ち着いた優しい声で言った。

あたしは、コウスケのこの言葉がどちらに対してのものなのかわからなかった。

あたしが口に出して言った言葉に対してなのか、心で思った憎悪の感情に対してなのか……

あたしは後者だと思う。

だってコウスケは、人が何を考えてるかを読み取るのが得意みたいだから。

「俺は兄貴を助けたい。心からそう思ってる」

あたしにとっては最低の人間でも、コウスケにとっては最高の兄なのだ。

「あんだ、いい弟持ってよかったね」

テツにそう言っと、まんざらでもないような表情を見せた。

ふてくされるかと思ったが、全く違う反応を見せたので驚いてしまった。

コイツにもまだ人間の心が残っている。

そう確信し、兄も弟を強く思っていることに気がついた。

まだ間に合うかもしれない。

あたしはこの2人の兄弟愛を思い知り、先ほどの感情を自分の中で撤回した。

死ねばいい人間なんてこの世にいない――

誰もが誰かに愛されている――

少なくともあたしは、そう信じたい。

突然、テツが激しく震えだした。

震えというよりほとんど痙攣だ。

どう見ても尋常ではない。

禁断症状――

コウスケは臆する事なく、ガダガタ震えているテツを押さえつけた。

テツは何かわけのわからない言葉を叫びながら手足をばたつかせて暴れている。

あたしは、手伝う事も出来たが、あえてそれをしなかった。

これはこの2人の問題。他人のあたしは手を出さない方がいい。

「兄貴！しっかりしろ！大丈夫だから！！」

コウスケは暴れるテツを必死に抑えながら、テツの叫び声に負けな
い大きさの声で叫ぶように言った。

それでもやはり、ジャンキーの力には勝てない。

テツはコウスケを振り払い、出口に近づこうと走り出した。

だが、力の強さの割には走るのは遅かった。

ヨロヨロとしていて、真っ直ぐには走れていない。

すぐにコウスケが追いつき、テツを捕まえた。

コウスケはテツを引きずるようにして元の位置に戻した。

それでもテツは暴れ続けている。

コウスケはついにテツの顔面を殴った。

2、3回骨と骨がぶつかる鈍い音が聞こえた。

暗さに慣れた目で、あたしはその光景をまばたき1つせずに見ていた。

目をそらせてはいけない。

全ての事を見ていなければいけない。

それが、自分にとっての義務であるかのように感じた。

やがて激しい物音は聞こえなくなった。

テツが気を失ったのだろう。

コウスケの荒い息づかいだけが、静かな倉庫内にこだましている。

「がんばってるんだね」

あたしはコウスケの隣に立ち、気絶しているテツを見下ろしながら言った。

「兄貴のこと、本当に…助けてあげたいから」

コウスケの頭をなでてやった。

サラサラの髪の毛の感触が心地いい。

コウスケの全身から力が抜けていくのを感じた。

ずっと張り詰めていたものが、ずっと緩んだようだ。

「なあ」

コウスケがあたしの腕をつかみ、床に座らせた。

湿った床に腰を下ろすと、その隣にコウスケも座った。

「ん？」

「カヅキも…本当に薬やってたの？」

やっぱり、コウスケにはウソはつけないようだ。

「やってないよ」

あたしは、少し口元を緩めて言った。

コウスケにウソを見破られた事が嬉しかったのと、ずっとついてきたウソから解放されるという事にホッとしたから。

あたしのこの表情は、コウスケに見えているのだろうか…

「やっぱりね。じゃあどうして俺にウソついたの?」

「昔…」

テツに薬薦められて、飲んだフリしてた。

トんだフリもした。

こんなどうしようもない奴でも大事な仲間だったから…

あと、ちょっとだけ怖かったから。

だから誰にも言わなかったんだ。

自分以外は知ってたらいけないと思って」

「でももう今は兄貴は仲間じゃないし、怖くもないだろう？

だったら俺にウソつく必要はない。

それに、もう何年もたってる」

あたしは一度大きく息を吸い込んだ。

それを勢いよく吐き出すと、息と一緒にいろんなものも吐き出せたような気がした。

「薬のせいで死んだ仲間もいた。だから自分だけイイコではいられなかった」

「仲間が…死んだの？」

コウスケはひどく悲しい声で言った。

優しい子だ。

「でもまあ、正直言って自業自得だよ。何もしてあげられなかったあたしも悪いけど」

「でも、その人たちの事今でもちゃんと覚えてるじゃん。それで充分だよ」

「ありがとね」

別離

待っても待っても少女の元に南條からの連絡はなかった。

少女が南條が死んだと知ったのは、少女たちが『ギルティー』に行った2日後だった。

ニュースでも学校の全校集会などでもなく、それを少女に知らせたのは少女の母親、藤嶺キョウカであった。

「南條先生が岩佐木に殺られた」

キョウカは怒りに満ちた口調で少女に言った。

「はあ？」

真夜中に叩き起こされ、突然そんな事を言われても、少女の思考回

路はうまく働かなかった。

「だから！南條先生が死んだの！殺されたの！」

「どういう事？」

やっと動き出した少女の頭には様々な事が浮かび上がった。

南條が死んだ？

岩佐木に殺られた？

ドウシテ…？

テツに連れられて岩佐木組の事務所に行った南條は、事務所内にあった薬を1つ残らず全てを燃やしてしまった。

岩佐木は怒り、まず南條を拷問にかけた。

お前は誰だ――

どうしてこんな事をしたんだ――

南條は何が何でも口を割らなかった。

どれだけ痛めつけられても何も言わなかった。

そんな時間が数時間続いた後、南條はその場で動かなくなった……

キョウカは少女にだいたいこのような内容を話して聞かせた。

ウソツキ――

岩佐木の所に殴り込んだりしないって言うたくせに。

あんたが死んでどうすんの。

そんな無茶をすれば死ぬとわかっていたはずなのに……

生徒を守る為に死ぬなんてそんなバカな教師はいないよ。

あんた以外にはね……

「大丈夫？」

キョウカが心配そうに少女の目を覗き込んだ。

「大丈夫」

少女は力強く言った。

不思議と涙は出ない。

もしかしたら、少女は南條が死を覚悟しているという事を予測していたのかもしれない。

「岩佐木、つぶそうか」

キヨウカはケロツとした顔で物騒な事を言った。

確かに、キヨウカなら岩佐木をつぶすことが出来るだろう。

藤嶺キヨウカ、旧姓高羽キヨウカ―

関東黒龍会会長、兼関東黒龍会高羽組組長。

「仇討ちはガラじゃないから。それに父さんの世話になるのはいやでしょ？」

藤嶺ゲンゾウ。

警視庁、警視総監。

この夫婦は世界最強に間違いない。

「まあ、やだね」

「だったらおとなしくしてて」

「わかったよ」

わかったとは言っているが、まだ不服そうな表情だった。

南條が死んだ。

殺された。

テツの上司に。

少女はテツを恨んだ。

そんな事をして意味がないと知っていても、それでも恨んだ。

だから、南條の死によって少女の心が空っぽになる事はなかった。

皮肉にも、テツへの恨みによって少女の心は無にならずにすんだのだ。

少女は南條に何を教えられたかを考えた。

少しは勉強しろ――

友達を作った方がいい――最後まで人を信じろ――

少しくらいは外れてもいいが、出来れば真っ直ぐに道を進め――

素直になれ――

少女は学校の先生が好きではなかったが、南條の事は好きだった。

だから、これからは南條に教えられた事を守っていこうと少女は決めた。

本人が死んでからでは遅いのかもしれない。

でも、南條なら許してくれるだろう。

見守っていてくれるだろう。

少女は南條のような大人になろうと思った。

この時が、少女が心を入れ替えた瞬間だった。

解明

「おはようございます」

朝倉マキが今日も素敵な笑顔で声をかけてくれた。

「あ、おはようございます」

あたしも気持ちよくあいさつを返す事が出来る。

「あれ？朝倉先生、指どうしたんですか？」

たまたま近くにいた徳沢アラタが割って入ってきた。

マキの右手を見ると、指にバンソウコウが貼ってある。

「ああ。今朝包丁で切っちゃって」

マキは少し照れながら苦笑した。

こんなに美しいのだから、何事も万能にこなせるものだと思
い込んでいたので、マキの小さな失敗に驚いた。

「朝倉先生でも苦手な事あるんですね」

アラタもあたしと同じ様な思い込みをしていたらしい。

そういえば、こいつと同じ事を考えている事が異常に多い。

なんかやだ。

「いっぱいありますよ。料理も裁縫も苦手です。携帯電話だってろ

くに使えないんですよ」

「へえ、意外だ」

あたしとアラタは声をそろえて言った。

あたしたちのそんな様子を見て、マキは声を出して笑った。

「本当に仲いいですね」

笑いすぎて目尻にたまっている涙を指でふきながらマキは言った。

「そんな事ないですから」

またハモってしまった。

マキはさらに笑った。

今日は一時間目に音楽の授業が入っているクラスはない。

よって、あたしの自由時間である。

職員室には教頭がいてウザいので、授業のない時あたしは音楽室にこもる。

まあ、自分の部屋みたいなものだからね。

音楽室の開きにくいドアはすでに修理済みなので、最近は朝一でイラつく事はなかった。

すーっと開いたドアの先、つまり音楽室の正面に目をやると、信じられないものが目に入ってきた。

ただ、ありがたいことに人間には学習能力というものが備わっており、もちろんあたしにもそれがある。

だから、精神的に苦痛になるような光景が眼前に広がっていても、動物の死体を自分の引き出しに入れられていたという過去の経験があるため、悲鳴はあげなかった。

あたしに対してのいやがらせに対応する自分の心がだんだんとクールになっていくというだけの事なのかもしれないが。

音楽室の正面には黒板があり、そのそばにはグランドピアノが置いてある。

だが、今そのグランドピアノはほぼない状態だった。

ほとんど原型をとどめていないのだ。

白い鍵盤には赤い何かで雑に塗装されている。

血ではなく、ただのペンキか絵の具であることが唯一の救いである。

でも、その鍵盤は本体から遠く離れた場所に無残に散らばっている。

ピアノに全く興味がない人が見れば、それがかつて鍵盤だった物だとは思わないだろう。

本体の方も弦はすべて切られているし、脚も2本折れている。

これはもういやがらせがどうかという次元ではない。

器物破損。

完全に犯罪じゃないか。

かわいそうなグランドピアノに手を触れてみると、『痛いよ』という声が聞こえてきそうだった。

ぬるっという感触があったので、手のひらを見てみると、赤いものがべっとりとついていた。

まだ乾いていないという事は今朝早くにやられたということなのかな。

もう一度、ピアノの内部を見ると、切れた弦の一本にほんの少しだけ赤黒いなにかがついていた。

それは間違いなく血だった。

見逃さなかった事が奇跡のように思うほど少量。

どうしてここにだけ本物の血がついているのだろうか…

「カヅキー、俺も1限ないんだ。ここに置いてくれよ。教頭がうぜえよ」

アラタが音楽室に入ってきた。

コーヒーカップを2つ持っている。

アラタがコーヒーカップを持って音楽室に来る事はよくあるが、それを落としたのは初めてだった。

「何だよ、これ…」

「わかんねえよ」

アラタは少しの間、啞然としていたが、すぐに我に返り、コーヒーカップをそのままにあたしの元へ駆け寄ってきた。

「ケガは？」

「ない」

「そうか」

あたしは怒りを感じなくなった。

そのうち、あたしもこのグランドピアノのようにされるんじゃないかと思ったが、それでも恐怖は感じなかった。

「教頭に報告しないと」

アラタが冷静な意見を言った。

「そうだね」

あたしたちの表情を見た教頭は驚いていた。

そんなに暗い顔をしていただろうか。

「2人共、一体どうしたんですか?!」

教頭はしどろもどろになりながら言った。

まだ何も知らないのに、あたしたちよりもあたふたしている教頭に少し怒りを感じる。

何であんたが焦ってんだよ。

「音楽室のグランドピアノが激しく壊されました」

あたしは低い声で言った。

「え？」

教頭がバカみたいな声で聞き返してきた。

もう一度同じ事を言うのが億劫だったので、アラタの顔を見つめた。

あんたが代わりに言ってよ。

「ピアノが誰かに壊されたんです。とにかく、音楽室に行ってみてください」

アラタは、あたしと違って感情が表情に出ないタイプらしい。

一応警察には連絡をしたみたいだが、まともに捜査してくれる気は

ないようだ。

教頭は、犯人が外部からの侵入者だと決めつけている。

学校内の人間がやったとなれば、いろいろ問題が生じて面倒だから。

でもきつと、教頭だって校内の誰かがやったとわかっているに違いない。

「教頭」

あたしがさっきよりも更に低い声で言うと、教頭は肩をビクつかせた。

あたしがそんなに怖いか。

「何ですか？」

「ピアノ、新しいの買ってもらえるんですか？」

「それは大丈夫だと思いますよ。」

あと、今日の音楽の授業は全て各教室で自習という事にしてください。生徒には事情を悟られないようにお願いします」

「わかりました」

あたしがそう言って、自分の席に座ると、教頭のため息が聞こえてきた。

あたしへの恐怖から解放されたからだろう。

ちっ。

一時間目終了のチャイムが鳴って少しすると、教師たちがそろそろ職員室に戻ってきた。

その中には朝倉マキの姿もある。

ふいに目が合うと、彼女は微笑みかけてきた。

本当に、女のあたしでも落ちそうになる。

マキがあたしから目をそらしてからも、あたしは何となくマキの姿を目で追った。

すると、ある事に気がついた。

すぐにマキに知らせなければいけない。

「朝倉先生。あの…スカートに…」

言いかけて違うと思った。

マキの黒のタイトスカートには赤いものがついていた。

最初は、女性特有の血だと思ったので知らせようと思った。

でも、本物の血なら黒のスカートについたところでそれほど目立たない。

だが…

血ではなく、赤いペンキなら…

もう一つ気がついた事がある。

マキの右手のバンソウコウ―

右利きのマキが包丁で右手を切ったりするだろうか。

どう考えても無理がある。

でも、ピアノの弦を切った時に、弾けた弦でハサミを持っている方の手を切っても不思議ではないのではないだろうか。

ありえなくもない。

あたしに嫌がらせをしていたのはマキだった。

でも、マキが犯人なら動機はなんだ？

あー、そうか。

あたしはバカだな…

自分の鈍感さにあきれる。

マキはたぶんアラタが好きなのだろう。

こんな簡単な事であんなヒドいやがらせを受けていたなんて……

その上、あたしはアラタの恋人なんかじゃない。

「なんですか？」

マキはにこにこしながら言った。

この笑顔の裏にはあたしに対する嫌悪感がどれだけあるのだろうか。

「スカートに赤いのついてますよ」

あたしは、全てわかったよ、という意味を込めてそう言った。

あたしのその思惑に気づいたらしく、マキの白く透き通ったような顔の色が、どんどんと青くなっていた。

「あ、あの…藤嶺先生…」

何か言いたいようだが、その先の言葉がみつからないらしい。

「大丈夫。アラタには言わないから。でも、ウサギとカラスには謝ったほうがいいね」

マキに殺された動物たちには悪いけれど、あたしはマキを許そうと思った。

「言い訳に聞こえると思うんですけど…」

ウサギは病気で死んだんです…

私がたまたま一番最初に見つけて…

カラスも…

あまりにもゴミを散らかすんで近所のおじさんが殺しちゃって…

それで…」

マキは必死だった。

でもウソをついている人間の目ではない。

警察官と極道の娘なので、その辺には自信がある。

「そうですか。それにしても、あのピアノはやりすぎです」

あたしは苦笑を交える事が出来るくらいに、油断していた。

「やりすぎ…ですね」

「ホントに。あんなの、もうピアノじゃなくてただの木材じゃないですか」

マキは少し表情を曇らせた。

「木材…？」

なんとなく話がかみ合っていないような気がする。

「あたしにはそう見えましたが。鍵盤は飛び散ってたし、脚も何本か折れてました」

あたしが見た光景とマキの記憶には違いがあるようで、マキは驚いた表情を浮かべた。

「私…そんな事までしてません。私がやったのは、鍵盤を赤く塗ったのと弦を切った事だけです」

家に帰ると、すぐに冷蔵庫に向かった。

中からビールを取り出し、プルトップを引っ張りながらソファに腰を下ろすと、一気に疲れが出てきた。

—私…そんな事までしてません—

マキの言葉が蘇る。

そう言っている時のマキの目もウソをついている目ではなかった。

それに、マキが犯人ならあの時ユウリはどうしてうちの近くにいたのだろう。

偶然？

それはないだろう。

考えが行き詰まった時に、パソコンからメール受信の音が鳴った。

パソコンにメールが届く事はめったにない。

体から溢れ出てしまいそうなくらいの嫌な予感を抱えたまま、パソコン

コンを開いた。

文書ファイルが添付されているようだ。

そのファイルを開いた時、あたしは絶句した。

メールアドレスの持ち主の見当はつかないが、このメールの発信者は天才なんじゃないかと思う。

あたしを痛めつける天才……

あたしは、すぐにある人に電話をかけた。

時間的に出ないかとも思ったが、相手は意外にも早く出てくれた。

「おたくのパソコンのセキュリティは一体どうなってんの?!

個人情報守る気ないんじゃないの?!

ハッキングされたら一番マズいパソコンでしょうが!

しっかりしろよ、ポリ公!!!!」

相手には何も言わずに、一方的に文句を言って切ってやった。

電話の相手は警視総監である我が父である。

折り返し父から電話がかかってきたが、ことごとく無視した。

今頃、キョウカに泣きついているに違いない。

あたしのパソコンに届いた文書ファイルの中身は、あたしやあたしの昔の仲間の過去の補導歴や前科をまとめたものだった。

警察のパソコンから個々のデータを拝借して、それを編集して1つのファイルに仕上げたのだろう。

そのファイルの中にはアラタの名前もあった。

あたしだけならまだいいが、アラタや他の仲間の名前もあるのは厄介だ。

もしこれがばらまかれたら、アラタまで巻き込む事になってしまう。

でもこれでわかった。

あたしに嫌がらせをしているのはマキだけではないのだ。

マキならアラタの名前は出さないんじゃないかと思うから。

犯人はもう1人いる。

いろいろ考えた結果、動物の死体とピアノの色付けと弦切りはマキの仕業、盗撮と自宅の鍵穴破壊とピアノ破壊はもう1人の仕業という事になった。

携帯電話を使えないというマキの言葉を信じる事にしたからだ。

携帯電話を使えないマキがハッキングしたり、サイトを作ったり出来るはずがない。

だとすると…

再びユウリの顔が頭に浮かんできた。

最近の若者ならパソコンくらい使えるだろうという勝手な思い込みのせいだ。

選択

携帯の着信メロディーで目が覚めた。

考えごとをしているうちに眠ってしまったようだ。

時計を見ると、午前2時。

こんな時間に誰だと思いながら携帯を手に取り、画面に表示されている名前を見ると、眠気は吹っ飛んだ。

『狭間コウスケ』

そう表示されている。

あまりいい話ではないだろうな。

「もしもし。こんな時間にどうしたの？」

コウスケは何も言わない。

電話越しでもコウスケの様子がおかしい事がわかる。

「コウスケ！どうしたの？何かあった？」

「兄貴が…死んだ」

テツを監禁している倉庫へ行くと、コウスケがうずくまっていた。

「コウスケ…テツが死んだって…どういう事？」

あたしは、良くない事を想像していた。

暴れ出したテツをコウスケが殴り、そのまま意識を戻さなかったのではないかという事…

つまり、コウスケがテツを殺したのではないかと考えていた。

「兄貴…」

コウスケはゆっくり顔をあげると、小さな声で話し出した。

「自殺…したんだ。」

俺が食い物買いにいってる間にやったみたいで…

帰ってきたらもう…

真っ黒になってた…」

「真っ黒って…？」

「自分で自分を燃やした」

いつもテツが座っていた場所を見ると、元々は人だったであろう物体が見えた。

その上には、コウスケの上着がかけてある。

あの黒い物体がテツなのだろうが、コウスケの上着をめくって確認する勇氣はあたしにはなかった。

遺書らしいものはなかったけれど、あたしもコウスケもテツが自ら死を選んだ理由がわかっていた。

どんどん壊れていく自分を守ってくれているコウスケを助けたかったのではないだろうか。

解放したかったのではないだろうか。

確かな事はもう誰にもわからないが、そう思う事によってあたした

ちも救われる気がする。

こんな形ではあるけれど、
テツは最期に人間にもどれたのではない
だろうか……

過去

新しいピアノを買ってもらい、まともに授業が出来るようになったのは、ピアノが壊されてから1週間後だった。

バンド活動は順調に進み、もうすぐ発表という段階にある。

コウスケはテツをなくしたけれど、あたしが思ったよりは落ち込んでいないようだ。

こうなるかもしれないとうすうす感づいていたのかもしれないし、テツが自殺することによってテツ自身も苦しみから解放されたと思っっているのかもしれない。

「カヅキちゃん」

連城ツバキが人懐っこい笑顔であたしを呼んだ。

「バンドの発表いつするの？」

「次の次くらいにしようか」

「でも、コウスケまだ戻ってきたばっかだし……」

コウスケは早くも学校に戻ってきている。

その方が余計な事を考えなくていいからなのだろう。

「大丈夫」

コウスケが自信満々の表情で言った。

「本人がああ言ってるし、次の次でいいよね？」

ツバキに確認すると、チラリとコウスケを見てからうなずいた。

ユウリ、ハル、ヤマトの3人は黙々と楽器の練習をしている。

一瞬ユウリと目が合ったけれど、すぐにそらされてしまった。

目はそらされてしまったけれど、最近ユウリがあたしにカラんでくる事が少なくなったような気がする。

「
ねえ
」

あたしはユウリに近づき、思い切って話し掛けてみた。

「
何？
」

ユウリはあたしの顔を見ないで返事をした。

てつきり無視されると思っていたので驚いた。

「あんた、あたしの家知ってる？」

ユウリの肩が一瞬ピクリとしたのをあたしは見逃さなかった。

「知らない」

声にも動揺の色がつかがえる。

この反応で、あたしはますますユウリを疑うようになった。

お風呂に入っていると、携帯電話が鳴っている事に気がついた。

めんどくさいと思いつつもバスタオルを体に巻きつけ、急いで携帯電話を取りに行った。

画面には『非通知』の文字が出ている。

急いで取りに行く必要もなかったなと思いながら、通話ボタンを押した。

「もしもし」

「…」

相手は何も言わない。

無言電話だろうか。

どうせ料金は向こう持ちなんだから、もうちょっと切らないでこ

う。

あたしもしばらく無言でいた。

「ちよっ
…」

電話の向こうからそう聞こえたのと同時に、電話は切れた。

ちよっ？

ただ、その一言を言った声がユウリの声に聞こえたのはあたしの錯覚なのだろうか。

そんな短い言葉だけでは声の主がだれかなんてわからないはずなのに、それをユウリだと思うなんて、自分で考えてる以上にユウリを疑っているのだろう。

そう考えていると、いてもたってもいられなくなった。

まだそれほど遅い時間でもないし、ユウリに直接会いに行こう。

髪を乾かし、洋服に着替えて、化粧はしないままユウリの家に向かった。

ユウリの家は金持ちらしく、ずいぶん立派なお屋敷だった。

インターホンを押すと、すぐに落ち着いた感じの女性の声が聞こえてきた。

ユウリの母親だろう。

「はい。どちら様でしょうか？」

「夜分にすみません。私、ユウリさんの担任をしております藤嶺と申します。ユウリさんはご在宅でしょうか？」

「少しお待ちください」

インターホンからの声が聞こえなくなると、すぐに玄関のドアが開いた。

出てきたのはユウリではなくユウリの母親であろう女性だった。

「あの、ユウリさんは…?」

「まだ帰ってないんですよ」

「いつもそうなんですか?」

「ええ」

「そうですね。では、何とか探してみます。見つけましたら家に帰るようには伝えておきます」

「宜しく願います」

「はい。では失礼します」

「あ、あの」

「何ですか？」

「あの子に用があつたんじや……」

「いえ。大した事ではないので。失礼します」

あたしは母親に軽く頭を下げてから歩き出した。

母親の視線を背中に感じたが、それ以上は何も言っていなかった。
次にツバキの家に行ってみたが、ツバキも家にはいなかった。

2人で夜遊びでもしているのだろうか。

じゃあコウスケはどうだろうかと思い、今度はコウスケの家に行ってみた。

インターホンを押してしばらくすると、いきなりドアが開き、コウスケが顔をあらわした。

「ああ。何？どうしたの？」

「ユウリを探しててね。」

家まで行ったんだけどいなくて…

ツバキに聞いてみようと思ってツバキの家にも行ったんだけど、いなかったんだよね。

だから、コウスケなら何か知ってるんじゃないかと思ったんだけど…」

「いや、知らない」

「そう…」

コウスケが知らないなら、きっとヤマトもハルも知らない。

「俺も一緒に探そうか？」

願ってもない申し入れだった。

「うん、お願い」

ゲームセンターやカラオケ、ファミレスなど高校生が夜遊びしそうな場所を探し回ったが、ユウリは見つからなかった。

一体どこへ行っただんだ…

「ちょっと休憩しようか」

年のせいか少し疲れてしまった。

コンビニで飲み物を購入し、近くの公園で少し休憩することになった。

「ユウリ、どこにいるんだろうね」

あたしが話しかけてもコウスケは返事をしなかった。

不思議に思い顔を見ると、遠くの方をじっと見ていた。

「どづしたの？」

「あれさ、ユウリとツバキだよな？」

コウスケが見ている方向を見ると、街灯に照らされているユウリとツバキの姿があった。

「でも…何か変じゃない？」

あたしには2人の様子が普通ではないように思えた。

ユウリはうつむいてベンチに座っており、ツバキは指に火のついたタバコを挟み、大きな態度でユウリを見下ろしている。

あたしの知っている2人の姿ではない。

よく耳を澄ませしてみると、2人の会話の声が聞こえた。

といっても、はっきり何を話しているのかはわからない。

ただ、何かを言い争っているという事はわかる。

ツバキは持っていたタバコを投げ捨てると、火種をつま先で踏み潰した。

そのすぐあとにバチンツという音が聞こえた。

ツバキがユウリの頬を張ったのだ。

その光景を見てピンときた。

あたしにいやがらせをしていたもう1人の犯人はツバキだ。

ツバキがユウリを置いてその場を離れようとした。

「おい、待てよ」

そう乱暴に言い放ったのは、コウスケではなくあたしだ。

2人はあたしの低い声を聞き、振り向いた。

「あんた…ここで何してんの？」

ユウリがいつもの調子で言った。

あたしにはそれが痛々しく感じた。

「あたしが聞きたいよ。あんたたち、すげえ楽しそうだけどどこで何してんの？」

ツバキはハツとして、先程自分で踏み潰したタバコの吸い殻を一瞬見た。

「タバコなんかどうでもいいから。あんたたち、一体どういう関係なの？」

さっきの光景はどう見てもただの友達ではない。

この2人には何か深いものがありそうだ。

ユウリとツバキは黙り込んでいる。

「じゃあ、今の質問はあとにする。次、あたしにいやがらせをしたのはあんた？」

あたしはツバキを見ながら言った。

「違う!!」

そう叫んだのはユウリだ。

「じゃあ誰がやったっていうの？」

ツバキから目を離さずに言った。

ツバキはもう自分を隠そうとしていない。

じつとあたしをにらみつけている。

「あたしがやったんだよ」

ユウリが消えそうな声で言った。

明らかに嘘をついている。

ツバキを庇っているようにしか見えない。

「あんたは黙ってな。あんたはあたしを庇えるような立場じゃないでしょ？」

いつもとは全く違う声でツバキはユウリに言った。

ユウリはツバキに怒鳴られると、黙ってしまった。

この2人には上下関係があるようだ。

「あんたに嫌がらせをしていたのはあたしよ」

ツバキはあたしに冷たい目を向けて言った。

「あたしに何の恨みがあんの？」

あたしがそう言つと、ツバキは声を上げて笑い出した。

ゾツとする笑い。

「あんたには一生わかんないと思うけど」

ツバキはあたしにそう言いながら、ユウリに目を向けた。

「全部教えてあげるよ」

ツバキは卑しい笑顔から元の冷たい表情に戻っている。

ツバキのその異常な態度に、あたしもコウスケもユウリも何も言えなかった。

ユウリの心境は、あたしたちのものとは違うようだけれど。

「あたしがあんたを恨んでる理由があるとするば、7年前にあんたがユウリを助けたって事かな」

「7年前？何の話かわからない。あたしは7年前からユウリを知ってるって事？」

思い当たる事はなかった。

7年前：

人を傷つけた事はあっても、助けた記憶はない。

それに、あたしは今の学校に赴任してきて初めてユウリを知ったのだ。

わけがわからない。

「まあ、覚えてないか。」

あたしたちはあんたの事忘れた事なかったけどね。

7年前まだあんたが制服来てた時、車に轢かれそうになったユウリとコウスケをあんたが助けたんだよ」

そう言われてみれば、そんな事があつたかもしれない。

公園の近くの横断歩道で小学生の男の子と女の子が轢かれそうになつてて……

あたしは2人を抱えて一緒に道路に転がって……

そのあと2人に拳骨して叱つた……

あの時の小学生がユウリとコウスケだったのか。

じゃあ、一緒にいた子たちはツバキとヤマトとハルだったのだろうか。

「ユウリを助けたからあたしを恨んでる…？」

だったらあなたが本当に恨んでるのはあたしじゃなくてユウリ…？」

あたしはユウリを見た。

ユウリは全身を震わせ、とても辛そうな顔をしている。

ユウリの今の感情がわからない。

「そう。あたしはユウリが大っ嫌い。あと、ユウリの父親の矢崎ツカサもね」

父親？

ツバキが何を言いたいのか、全くわからない。

あたしは黙ってツバキの話の続きを聞くことにした。

「あたしのお父さん、矢崎に騙されたの。」

いつの間にかわけのわからない組織に入れられて、わけのわからない物たくさん買わされて、そのせいでお父さんがやってた会社も潰

れた。

気がついたらうちには借金しかなかった。

矢崎はさ、マルチの組織のトップなんだよ。

だから矢崎家は金持ちなわけ。」

ツバキの話をここまで聞くと、だんだん先がわかってきた。

だけど、最後まで聞かないわけにはいかなかった。

「矢崎ツカサはあたしにこう言ったの。

『お前の親父の借金、俺が払ってやってもいい』って。

でも、もちろん条件がある。さて、何て言ったでしょう？」

あたしはその残酷なクイズに答えなかった。

答えられなかった…

「俺のおもちゃになれ」

あたしは目をつむった。

あまりに酷い話だったからではなく、それを語るツバキが笑っているから。

この子の心は壊れてしまっている。

「小5でそんな事言われたあたしの気持ちかわかる？」

それから7年間、あたしは本当にあの男のおもちやだった。

矢崎はお父さんが働こうとすると、ことごとく邪魔すんの。

だから、あたしは矢崎から逃げるわけにはいかなかった。

家族を死なせなくなかったから。

あたしがそんな目に合ってる時に矢崎の娘は父親の金で何不自由なく生活してる。

何をして稼いだ金かも知らないで。

だからあたしはユウリも恨んだ」

ユウリは声を出さずに泣いていた。

自分の父親がツバキにした事を全部知っていて、それに対しての申し訳なさからだろう。

「ユウリは7年前あんに命を救われてからずっとあんに憧れていた。

異常なくらいにね。

だから、あんたを痛めつければユウリも傷つくと思った。

ユウリ本人にやっ たって我慢すればいいだけの話だし、そんなんじや足りない」

そういう事か。

ツバキはユウリを傷つける為に、あたしにいやがらせをしていた…

あたしが自宅のマンションでユウリを見た時、あれはツバキを追いかけてきたのか、ツバキが仕掛けたであろう隠しカメラを取り除いてくれようとしていたのではないだろうか。

ユウリはきつと一生懸命あたしを守ってくれていたのだ。

先程電話の向こうで聞こえた『ちよっ』というユウリの声。

『ちよっと待って』

こう言いながらツバキから電話を奪い取り、あたしへのいたずら電話を阻止してくれたのではないだろうか。

ユウリをより深く傷つける為、ツバキは自分があたしに対してした事を全てユウリに話している、もしくは目の前で実行していたはずだ。

「あたしはユウリが死ねばいいと思ってる。

だからユウリを助けたあんたも傷つけばいい。

あんたを苦しめる事はあたしにとっては一石二鳥だったわけ」

ツバキはクスクス笑っている。

誰かツバキを助けて下さい…

あたしがそう思った瞬間、コウスケが動いた。

今まで全ての話を黙って聞いていたコウスケは、何のためらいもなくツバキの元へ歩み寄った。

そして、フワリとツバキを抱きしめた。

「ちょっと！何すんの？！」

ツバキはコウスケの腕の中で暴れ出した。

ジャンキーを押さえつけるほどの腕力のコウスケは、暴れ出したツバキを決して離さなかった。

「お前の悪い気持ち、全部俺が引き受けてやる。

ユウリへの恨みも、ユウリの父親への恨みも、カヅキへの恨みも全部俺に吐き出せ。

全部つぶしてやるよ」

コウスケにそう言われたツバキはポロポロと涙を流した。

今まで誰にもそんな風に言われた事がなかったのだろう。

ツバキのコウスケへの想いは本物だったのかもしれない。

「離れてー!」

コウスケに心を開いたように見えたが、ツバキはコウスケを突き放したのと同時にあたしたちの前から逃げ出した。

コウスケはすぐに追いかけていった。

あたしはその場に残ったユウリを放っておくことが出来なかったの
で、ツバキはコウスケに任せて公園に残る事にした。

「辛かったね」

あたしがユウリを抱きしめると、いろんな感情が溢れてきたのだろ
うか声をあげて泣き出した。

生まれたての赤ん坊のように一心不乱に泣き続けるユウリがかわい
そうで、そしてたまらなく愛おしくて、さらに強く抱きしめた。

ユウリも抵抗することなく、あたしの体にしがみつくようにして泣
いている。

しばらくその状態が続いた後、あたしたちは破滅の音を聞いた。

誰かに心臓を握られたような気がした。

その音を聞いたユウリの涙はピタリと止まり、勢いよく立ち上がった。

「先生、早く!!」

ユウリはあたしの手を引いて、音が聞こえてきた方向へと走り出した。

その場所につくと、あたしの頭の中は真っ白になり、卒倒しそうになった。

横断歩道の真ん中にコウスケとツバキが倒れている。

白のセダンが急発進したのが見えた。

その光景を見れば、今ここで何があったのかわかる。

セダンに轢かれそうになったツバキをコウスケが突き飛ばし、ツバキの代わりにコウスケがセダンにぶつかった…

あたしもユウリもその場から動けなかった。

4人の内、一番最初に動いたのはツバキだった。

ツバキはコウスケを見て一瞬目を大きく開いたが、次の瞬間には服についた汚れをパンパンとはらっていた。

そして、あたしたちを睨んで言った。

「コレが一番の復讐かもね」

ツバキはコウスケを助けようともせずに、そのまま走り出した。

ツバキが走り出した瞬間、あたしにはツバキの頬を伝う大粒の涙が見えた。

コウスケへの想いよりも、あたしたちへの憎しみを選んだという事なのだろうか…

あたしたちはツバキのその行動を機に、呪縛が解けたように動けるようになった。

「ユウリ！救急車！早く！」

「はい！」

ほとんど片言でユウリに命じると、あたしは急いでコウスケの元へ駆け寄った。

「コウスケ！コウスケ！」

次々と涙が溢れてくる。コウスケの口元に手をかざしてみても、呼吸を感じられない。

心臓に耳を当てても音が少しも聞こえない。

「コウスケ…死なないで…」

泣いている場合ではない。

助けないと。

コウスケのあごを上げ、口から息を吹き込む。

コウスケの胸が上下に動く。

死なないで…

心臓の上で両手を重ね、そのまま何度か押す。

死なないで…

また息を吹き込み、心臓を押す。

その行為を何度も繰り返した。

死なないで…

真実

やがて救急車が到着した。

「代わります！」

救急隊員があたしに言った。

救急隊員の心臓マッサージの手つきはあたしのぎこちない手つきとは大違いだ。

あたしとユウリも救急車に乗り込み、コウスケと共に病院へと向かった。

救急隊員が必死でコウスケを蘇生させようとしてくれている中で、

あたしもユウリもただコウスケの名前を呼び続ける事と、いるかい
ないかわからない存在に祈る事しかできない。

それがもどかしくて仕方なかった。

「コウスケ…コウスケ…」

あたしが力のない声でつぶやいていると、ユウリがあたしの手を握ってくれた。

『大丈夫。コウスケは絶対に死なない』

ユウリの手から体温と一緒に伝わってきた言葉。

あたしもユウリの手を握り返した。

「動いた…」

救急隊員がホツとしたのが背中 でわかった。

彼はあたしたちになっこり笑いかけると、そっとその場所をあたしに譲ってくれた。

コウスケの心臓に耳を当ててみる。

トクトク…

動いてる…

ちゃんとコウスケの音が聞こえる。

頬に触れると、コウスケの体温をしっかりと感じた。

少し赤みもさしている。

生きてる...

生きてる...

「よかった...」

隣でユウリがつぶやいた。

今度はあたしがユウリの手をとる番。

『ありがとう』

ユウリはあたしの目を見て、コクリとうなずいた。

ちゃんと伝わったみたいだ。

病院に着くと、すぐにコウスケはストレッチャーに乗せられ、手術室に運ばれた。

一度止まった心臓は動いたけれど、まだ安心は出来ない。

あたしたちはまた祈った。

待合室のイスに座っていても、あたしもユウリも言葉を発しなかった。

ただしっかりと手をつないでいた。

そのままどんどん時間がたち、8時間後。

手術室の自動ドアが開いた。

そこから緑色の手術着を身にまとった医者と看護師が出てくる。

「つきそいの方ですか？」

「はい……」

医者はマスクを外し、ニツコリと笑った。

「もう大丈夫ですよ」

医者の方のこもった言葉に心底安心した。

「ありがとうございます……」

「彼の命を救ったのは私じゃなくて、あなたですよ」

「え……？」

「あなたの心臓マッサージがなかったら助からなかったかもしれない。あなたの彼を助けたいという気持ちが彼を救ったんです」

医者はそう言っ、て、病院の長い廊下を歩き始めた。

「心臓マッサージなんてどこで習ったの？」

ユウリの表情は明るかった。

ユウリはコウスケの心配をしながらもあたしを気遣ってくれていた。

なんて優しい子なんだろう…

今まで誤解していた事をすごく申し訳なく思った。

「車の教習所と、アラタ…徳沢先生が、いつか役に立つかもしれないな
いって教えてくれたんだ」

「ああ、なるほど」

ユウリはあたしに笑顔に向けた。

この子の笑った顔をもっと早く見たかった。

「ねえ、ユウリ」

「ん？」

「あたし…あんたをずっと疑ってた…」

あたしはユウリに頭を下げた。

すると、ユウリが笑顔のままあたしの目を下から覗き込んだ。

「それでいいんだよ」

ユウリのこの意味深な発言が理解出来ない。

「どういう意味？」

「あたしに疑いがかかればいいと思ってた。ツバキがやったってバシなければいいと思ってたんだ」

ユウリは穏やかな表情を変えないで言った。

「どうして…?」

「だってあの子がやったのはいやがらせとかのレベルじゃないじゃん。ほとんど犯罪だし。だから守ってあげないと」

「守る…?」

「友達だもん。当たり前でしょ?」

「でも…どうしてツバキに逆らわなかったの? あんたはなんにも悪い事してないじゃん。友達…だから?」

「ツバキの辛さを分けてほしかったから。」

ツバキは自分が脅してるからあたしが言つこと聞いてるんだって思ってたみたいけど」

「脅されてたの?」

「あんたの父親を警察に売るって。」

自分も売春で捕まるだろうけどそれでもいいからって。

でもあたしは父親よりもツバキが捕まる方が嫌だった。

父親なんてむしろ捕まるべきだと思ってるけど、ツバキは何も悪くない」

この子は…

どんな人間も憎まずに愛せる女神のような子だ。

「もしかして…あの日あたしのマンションにいたのも、授業中にあたしにカラんできたのも全部…？」

ユウリはニツコリ笑っただけで何も言わなかった。

マンションでユウリの姿を目撃した時…

あれはわざとだったんだ。

ツバキを追いかけてきたのでも、カメラを取り外しにきたのでもない。

わざとあたしに自分の姿を見せて、自分に疑いがかかるようにしていたんだ。

授業中の態度も、いつかツバキがあたしに何かするだろうとわかっていて先手を打っていたに違いなかった。

公園からツバキが走り去った後ユウリが泣いていたのは、ツバキを守り切れなかった事が悔しくて、辛かったからなのかもしれない…

「でも…」

あたしが自分の愚かさに愕然としていると、ユウリが口を開いた。

「授業中のあたしの態度はツバキの為だけじゃないんだ」

「他にも理由があるの？」

ユウリはあたしの目をじっと見つめた。

あたしを見つめるユウリの顔があまりにも美しくて息が苦しくなった。

女神…

「昔の先生に戻ってほしかった。

7年ぶりに再会した先生は…

なんか普通の大人になってて、それが嫌だったんだ。

7年前初めて会った時のあのたくましい先生に戻ってほしかった。

だからわざと怒らせようと思って…。

ごめんね。

嫌な気持ちにさせたよね」

ユウリなら、この腐った世界を変えられるような気さえた。

宝物

「調子どう？」

病室のドアを開けながら、中にいるコウスケに声をかけた。

「うん、いい感じ」

コウスケの容態はすっかり良くなっていた。

退院はまだもう少し先になるという事だが、こうして見舞いに来るのも悪くない気分だ。

「そう。よかった」

あたしは持参したプリンにスプーンをそえてコウスケに渡した。

コウスケとプリンの2ショットは似合わない気がしておかしかった。

「なあ」

コウスケがスプーンをくわえたままあたしを呼んだ。

「ん？」

コウスケはじっとあたしを見ている。

コウスケの緑色の瞳にまた吸い込まれそうになった。

この瞳の色が生まれつきだというから驚きだ。

「やっぱ何でもない」

「はあ？ちよつと何？気持ち悪い」

「ホント、何でもないから」

「そんなわけねえだろ！早く言え」

コウスケの胸ぐらを鷲掴みにして揺さぶった。

「俺、けが人なんだけど」

「うるさい」

「うるさいって...」

あたしたちはここが大部屋だという事を忘れてじゃれあった。

「あんたたち、ホントうるさいから」

病室に入ってきたユウリに注意されて、2人でしょんぼりした。

ごめんなさい。

「コウスケ、調子良さそうだね」

制服を着ていないユウリは少し大人っぽく見える。

「ああ。おかげさまで」

寝間着姿のコウスケは逆に少し幼く見える。

「あ、プリン。あたしも食べていい？」

「いいよ。ユウリの分も買ってきたから」

「やった。ありがとう」

あたしたちのやり取りをコウスケは嬉しそうに見ている。

「お前ら、何で急に仲良くなったんだよ」

そんな質問をしながらも、答えを求めている風ではなかった。

あたしたちは何も言わずにコウスケに笑いかけた。

コウスケはそれでも満足そうな顔をしている。

シャワーの音に、携帯の着信メロディーが紛れ込んできた。

何でまたこのタイミングなんだよ。

めんどくせえ。

画面表示を確認すると、ユウリの名前だった。

「
もしもし」

ユウリから電話なんてめったにないので、単純に嬉しかった。

「え？何？」

電波が悪い。

「……んだ」

「コウスケが死んだ」

電波じゃなくてあたしの耳が悪いようだ。

「何？」

「もう一度聞きたいの？」

今度は本当に耳が聞こえなくなった。

指の力が抜けて、携帯を床に落としたのに、何の音も聞こえない。

何も考えられない。

ユウリは今何を言った？

えーっと…

ー コウスケが死んだー

ウソだ。

だってコウスケは生き返ったんだから。

じゃあ、誰が死んだの？

あり得ない。

コウスケが死ぬなんてあり得ない。

だって…

ついこの間プリン食べながら笑ってた。

幸せそうな顔で笑ってた。

あー、そうか。

ユウリがへたな冗談を言ったんだ。

おもしろくないし。

そこであたしの脳は活動を休止した。

気がつくと、あたしは自分のベッドで横になっていた。

部屋の中を見渡すと、ユウリがいた。

ハルもヤマトもいる。

「あれ？どうしたの？

」

ユウリに言った。

「気がついたんだね。よかった」

ユウリはホッとため息をついた。

「あたし、倒れたの？」

今まで倒れた事なんて一度もなかった。

なんだか不思議な気分だ。

ユウリはあたしが寝ているベッドに腰かけた。

「あたしたちがこの部屋に来た時、先生、ドア開けてくれたのと同じ時に倒れたんだよ。覚えてない？」

ぼんやりとその時の光景が蘇ってきた。

あたし、なんで倒れたんだろう。

「ユウリ」

「ん？」

「さっきの冗談笑えない」

「冗談？」

ユウリは自分が言った事を覚えていないようだ。

あ、もしかして。

覚えてないんじゃないくて、あれはあたしの夢だったのかもしれない。

「ごめん。今の気にしないで。夢の話だから」

ユウリは悲しそうな目をあたしに向けた。

「冗談でもないし、夢でもないよ。コウスケは死んだの」

ユウリの言っている事の意味がわからない。

今もまだ夢の中にいるのかな。

「だから、それはもういいから」

あたしはユウリに笑いかけたが、ユウリは悲しい表情のまま笑ってはくれなかった。

「あたしは…もう先生にウソついたりしないよ」

ユウリは泣きながらあたしを抱きしめた。

でもあたしは泣けなかった。

「コウスケに会いに行こうね」

ユウリはあたしの頭をなでながら、我が子を諭す母親のように言った。

あたしは、まだよくわからないまま小さくうなずいた。

マンションの外に出ると、アラタがいた。

アラタの隣には車が止まっている。

ハルかヤマトが呼んだのだろう。

アラタは何も言わずに後部座席のドアを開けてくれた。

あたしは、ユウリに体を支えられながらゆっくりとアラタの車に乗り込んだ。

走行中、口を開く者はいなかった。

ユウリはずっと、あたしの手を握ってくれていた。

着いた場所は、コウスケが入院していた病院。

今はここにコウスケが眠っているらしい。

看護士に案内してもらい、霊安室にきた。

冷たい鉄のドアを押し開けると、部屋の真ん中にコウスケはいた。

顔には白い布がかぶさっている。

「顔、見てあげようか」

ユウリはコウスケの顔にかぶせてある白い布を取り去った。

あらわれたのは本当に眠っているようなキレイな顔だった。

コウスケの頬に触れると、ひんやりと冷たい。

コウスケのキレイな緑色の目はもうあたしを映してくれない。

コウスケの制服の甘い香りはもう感じられない。

コウスケはもうあたしに笑いかけてくれない。

コウスケは…

もう二度と動かない。

ユウリが泣いてる。

ハルが泣いてる。

ヤマトが泣いてる。

アラタが泣いてる。

だけどあたしは泣けない。

少しも涙が出て来ない。

ただ、空を見たくなった。

コウスケの遺影はとていい物だった。

すごく幸せそうに笑っている。

いつ撮った写真なんだろう。

こんな顔をしているコウスケの隣にいたかった。

「いい顔だね」

制服を着たユウリが言った。

「そうだね」

あたしは微笑んで言った。

コウスケが死んだと聞いた時から、あたしはまだ一度も泣けなかった。

「藤嶺さん…」

黒いスーツを着た男があたしを呼んだ。

コウスケの手術をした医者だ。

「何ですか？」

「本当に…申し訳ありませんでした!!」

医者はいきなりあたしの足元で土下座をした。

「そんな事されても困ります」

コウスケに両親はいない。

だからこの医者は誰に謝ればいいのかわからなかったのだろう。

コウスケが死んだ原因は、頭の中に出来ていた小さな傷だった。

あたしは医者じゃないからしっかりと理解できていないが、とにかくこの医者がコウスケのその傷を見逃した。

内臓の治療は完璧だったが、頭の傷はわからなかったとの事だ。

わからないなんて事はある得ない。

しっかり検査していればわかったはずなのに…

「でも、謝らせて下さい!!」

「帰ってください」

医者を責めてもコウスケは戻ってこない。

もう元通りにはならない。

だけど、この医者に対して怒りを感じなかった。

コウスケが死んだのは確実にこの医者 of せいだし、最善をつくしてくれたのだから仕方がないなんて聖者のような事は言えない。

ただ、怒れない。

どうがんばっても怒りが沸いてこない。

怒りも悲しみも感じない。

涙も出ない。

あたしの感情は壊れてしまったのだろうか。

「帰れよ」

いつの間にそこにいたのか、ヤマトが言った。

「迷惑だから」

ハルが言った。

ヤマトもハルもそしてユウリもちゃんと怒れている。

それが少し羨ましかった。

「帰ろうか」

ユウリが優しく言った。

あたしはコクリとうなずいた。

「送ってくれてありがとね」

ユウリ、ハル、ヤマトの3人に礼を言って別れた。

自分の部屋番号が書かれたポストの中をのぞくと、ダイレクトメールやらピンクちらしやらが入っていた。

一応それを手に取り、部屋に持って入る。

束のままゴミ箱に入れると、真っ白の封筒が目についた。

ゴミ箱から取り出してみて、目を疑った。

宛名の字…

間違いなくコウスケの字だ。

どうして...？

あたしは慌てて封筒を開け、中身を読み始めた。

『藤嶺カヅキ様

突然、手紙なんてビックリしただろうな。

どうしても話したい事があつただけど、どうしても自分の口からは言えなかったから手紙を書く事にしました。

直接渡すのも照れくさいから、看護師さんに頼んで送ろうと思います。

まず、ツバキの事許してやってほしい。

あいつがカヅキにした事もユウリにした事も絶対に許されるべき事じゃないってわかってる。

でも、カヅキには誰も恨んでほしくないんだよ。

勝手な事を言ってるってわかってる。

でも、カヅキは俺にとってすごく大事な人だから、恨みなんて感情は持ってほしくない。

俺の気持ち、押し付けてごめん。

どうしてもわかってもらいたいんだ。

ツバキの気持ちも、俺の気持ちも。

あと、7年前からずっと言いたかった事があります。

もしかしたら、もう気付かれてるかもしれないな。

7年前、助けてもらった時からずっと、あなたを想っていました。

あれから、カヅキの事何とか探そうとした事もあった。

でもどうがんばっても見つからない。

だから、中2になった時探す事を諦めた。

小学生や中学生での人捜しなんて、たいした事出来ねえんだからみ
つからなくて当たり前だよな。

探すのは諦めたけど、もう一度会いたいって想いは捨てなかった。

運命って言葉を信じてみようと思ったんだ。

カヅキを想いながらひたすら待ってたら、ある日信じられない事が起こった。

カヅキが、俺の高校に赴任してきたんだもんな。

あの時は本当に神様に感謝したなあ。

奇跡だと思った。

運命だと思った。

心臓がドキドキしすぎてマジで死ぬかと思ったよ。

俺はあなたが好きです。

心から。

俺にはカヅキ以上に大切なモノなんてない。

それはきつとこれからも変わらないだろうと思う。

この手紙、読み終わったら捨ててください。

誰かに見られたら困るから。

次に会った時、カヅキはなんて言うのかな。

俺、今すげえ緊張してる。

今日は眠れないかもな。

でももうすぐ消灯時間だから、明日もカヅキが見舞いにきてくれる事を願って眠ろうと思います。

おやすみ。

カヅキの笑顔が夢に出てくればいいな。

じゃあ、また今度。

狭間コウスケ

㊦

涙が出た。

今までたまっていた分が全部溢れ出した。

—じゃあ、また今度—

もう会えないじゃん。

あんた、もう目覚まさないじゃん。

今度はあたしが探す番？

あんたはどこかにいるの？

どこを探してもみつかるわけではない。

あんたはもうどこにもいないんだから。

自分だけ気持ち伝えて逝ってしまうなんてずるい。

あたしにだって言いたい事あるよ。

あなたが逝ってしまってから気づいた事。

ツバキの事、とっくに許してるー

あなたの気持ちもツバキの気持ちもユウリの気持ちも全部わかってるー

あたしもあなたが好きー

あなたを愛します。

心から。

完結

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7772q/>

—不可能な共存—

2011年2月12日22時51分発行